高野山奥の院に所在する堀尾家墓所について

――近世大名墓と堀尾家の宗教的背景――

西尾克己
稲田　信
木下　誠

１．高野山奥の院と近世大名堀尾家墓所

高野山は、和歌山県伊都郡高野町に所在する標高約1,000m前後の山々の総称である。弘仁７年(816)より弘法大師空海が修行の場として開いた高野山真言宗の聖地で、標高約 800mの平坦地には「壇上伽藍」と呼ばれる根本道場を中心とする宗教都市が形成されている。現在、山内の寺院数は高野山真言宗総本山金剛峯寺をはじめ百か寺あまりに及ぶ。

奥の院には、弘法大師の御廟と灯籠堂があり、その参道脇には皇室、公家、大名などの墓所が営まれ、近世大名の巨大な石塔が多数並ぶ。奥の院の入り口は寺院群から東に続く一の橋と、中の橋の２箇所があり、一の橋から御廟までの参道は約２kmの道のりとなっている。

近世大名（松江藩主）堀尾家墓所は、奥の院にある一の橋から中の橋に至る間の参道脇にある。現在、堀尾家に関係する石塔は海軍整備練習生慰霊碑などが建つ平坦面（約 90 ㎡：幅約 10m×奥行約９m）の奥側に 11 基、左側面に２基が確認されている。近くには、鳥取池田家墓所、土佐山内家墓所、薩摩島津家墓所などがある。近世の堀尾家墓所と石塔群については、宝永４年（1707）の「奥院絵図」、

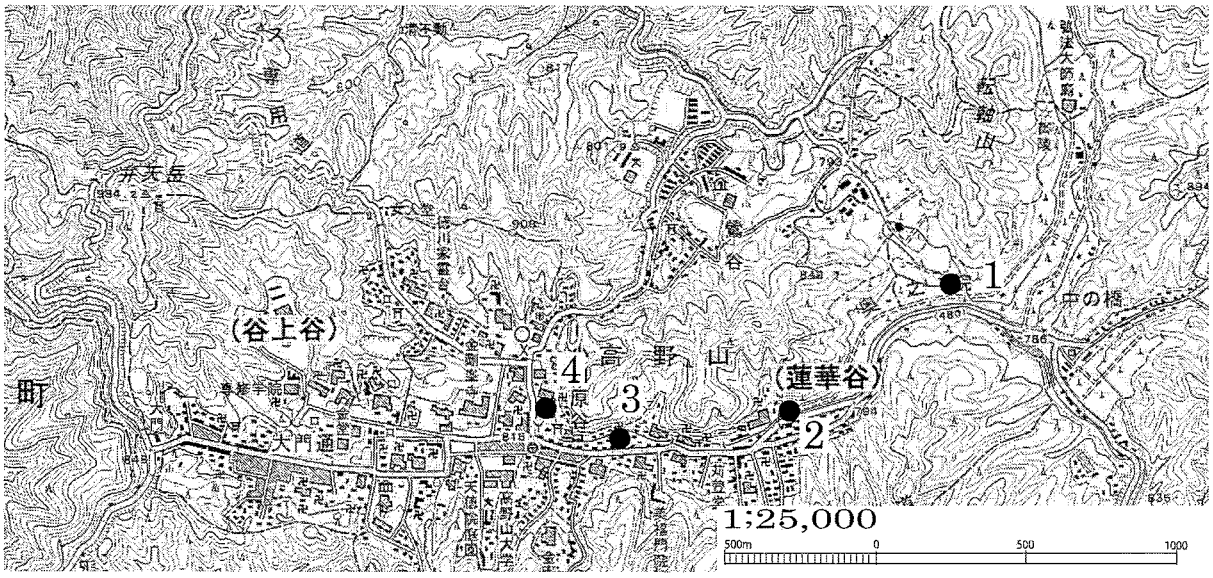


図１　高野山と堀尾家墓所位置図

１．堀尾家墓所　２．一の橋　３．大円院　４．普賢院

寛政５年（1793）の「高野山奥院総絵図」に描かれている[注1]。

高野山での堀尾家の宿坊は龍生院で[注2]、紀州藩が天保10年（1839）に編纂した『紀伊續風土記』「高野山之部」龍生院の項には、「（前略）遮黎大師眞作の多聞天を安置して本院の鎮護とす 今内道場の本尊是なり 毎歳正月毘沙門講あり 曩昔院宇丙丁の災ありし時脊の山脚に相好端厳として立ち給ふ 堀尾吉晴主此天の霊異を仰信ありて宮殿を修し正五九の月には武運栄久の誓祈を乞ひ香華佛餉の資糧を附す 且堀尾家雲隠両国の太守たりし時建立の碑数基あり 伊勢亀山石川侯先操を追ひて壇契篤し」とある[注3]。

「堀尾吉晴主・・・正五九の月には武運栄久の誓祈を乞ひ香華佛餉の資糧を附す」の記事が示すように、堀尾吉晴は堀尾家の武運栄久の誓祈（仏に誓いを立て、 加護を祈る）を願い高野山龍生院を宿坊とし墓所を設けるとともに、領国支配や松江城下町形成、松江城築城などにあたって「長栄」「武運長久」などの誓祈、祈祷を高野山真言宗に願ったと考えるのが妥当であろう[注4]。

また、「堀尾家雲隠両国の太守たりし時建立の碑数基あり 伊勢亀山石川侯先操を追ひて壇契篤し」と、墓所と石塔についての記述があり、高野山においても、妙心寺春光院（京都市）[注5]、白華山養源寺（東京都千駄木）[注6]と同様に、寛永年間に大名家として断絶した後、堀尾家の菩提は堀尾忠晴娘（石川廉勝妻：憲之母）が嫁いだ石川家[注7]によって弔われていたことが分かる。

注１　日野西眞定編著「奥院絵図」「高野山奥院総絵図」『高野山古絵図集成/解説索引』タカラ写真製版株式会社 1988

注２　日野西眞定編著「南山奥之院諸大名石塔記」『高野山古絵図集成/解説索引』タカラ写真製版株式会社 1988、明治 12・23・26 年の「高野山寺院調査票」によれば、龍生院は高野山蓮華谷と谷上谷にあり、その後蓮華谷の龍生院は大円院に引き継がれ、谷上谷の龍生院は東京都港区三田へ移転している。なお、出雲国の宿坊は中世以来、高野山普賢院で、松江市域内にも関係史料が残るとともに、現在でも出雲地方の真言宗寺院との関係が深い。

注３　「紀伊續風土記高野山之部」『紀伊続風土記（五）』歴史図書社 1970、『紀伊續風土記』は紀州藩が文化 3 年（1806）から天保 10 年（1839）にかけて、藩士で儒学者の仁井田好古らに編纂させた紀伊国の地誌で、高野山とその寺領の記述は５輯中２輯と詳細である。

注４　稲田信、内田文恵、居石由樹子「松江城天守創建に関わる祈祷札について」『松江城研究』2 松江市教育委員会 2013、松江城の鬼門（北東）には真言宗千手院（松江市石橋町）、裏鬼門（南西）には真言宗報恩寺（松江市玉湯町）を配置するなど、高野山真言宗との関係は極めて深い。高野山龍生院（『紀伊續風土記』「高野山之部」龍生院）と、松江城天守創建に関わる「奉讀誦如意珠経長栄処」祈祷札にある如意珠経（如意寶珠轉輪秘密現身成佛金輪呪王経の略：仏書解説大辞典参照）は、ともに龍王に関係している。

注５　岡崎雄二郎、西尾克己、稲田信、樋口英行、佐々木倫朗、松原祥子「春光院に所在する来待石製石塔群について」『松江市歴史叢書』1　松江市教育委員会 2007

注６　西尾克己、稲田信、佐々木倫朗「白華山養源寺（東京都千駄木）に所在する近世大名堀尾忠晴石塔について」『松江歴史館研究紀要』1　松江歴史館 2011

注７　堀尾家と石川家は、近江膳所藩の石川家初代当主となる石川忠総に堀尾吉晴の娘が嫁ぎ、その子廉勝に堀尾忠晴の娘が嫁ぐという二重の姻戚関係を持っていた。廉勝は忠総より早世したため、石川家は廉勝の子憲之（忠晴孫）が継いだ。憲之は膳所藩の２代藩主で、後に伊勢亀山藩主、淀藩主となる。

２．堀尾家に関わる石塔群（五輪塔、宝篋印塔群）

堀尾家の墓所は、奥の院の参道に面した幅約 10m、奥行約 9mの平坦面奥にあり、堀尾家に関わる石塔として、13 基が確認されている。左側面には、堀尾家とは直接かかわらない石塔も５基並んでおり、便宜上、奥側の右端（東側）から順に１～18 号石塔とする（図２）。堀尾家に関わる石塔は奥側に横一列に並んだ１～11 号（11 基）、左側面に横に並んだ 13、14 号（２基）で、１、９～11 号石塔は宝篋印塔、２～８、13、14 号石塔は五輪塔である。なお、台石のある石塔のうち、長方形の石材を横に並べ、台石として複数の石塔で共有できるよう利用しているものもある。１・２号で１枚の台石（幅 150 ㎝、奥行 110 ㎝、厚さ 25 ㎝で最も大きい）、２・３号で１枚の台石、３～５号で１枚の台石、５・６号で１枚の台石、７・８号で１枚の台石、９～11 は各１枚の台石を用いている。

宝永４年（1707）の「奥院絵図」には、「堀尾山城守」として正面に鳥居を配し、玉垣に囲まれた墓域内に石塔 24 基が描かれている。寛政５年（1793）の「高野山奥院総絵図」には、「堀尾山城守先祖」として同じく正面に鳥居を配し、玉垣に囲まれた墓域内に石塔２４基が描かれている。２つの絵図とも、石塔の大きさや五輪塔などの形態が描き分けられており、手前から奥に向かって大型化している(注1)。この絵図の描写が正しいとすれば、絵図の描かれた時点では、参道脇の玉垣に囲まれた墓域内に現在の約２倍の石塔が並んでいたことになる。おそらく近代以降に、堀尾家の墓所は墓域の縮小と石塔の整理が行われ、現在の形となったのであろう。堀尾家に関わる石塔群が建つ幅約 10m、奥行約 9mの平坦面は、元の墓域の大きさを反映している可能性がある。

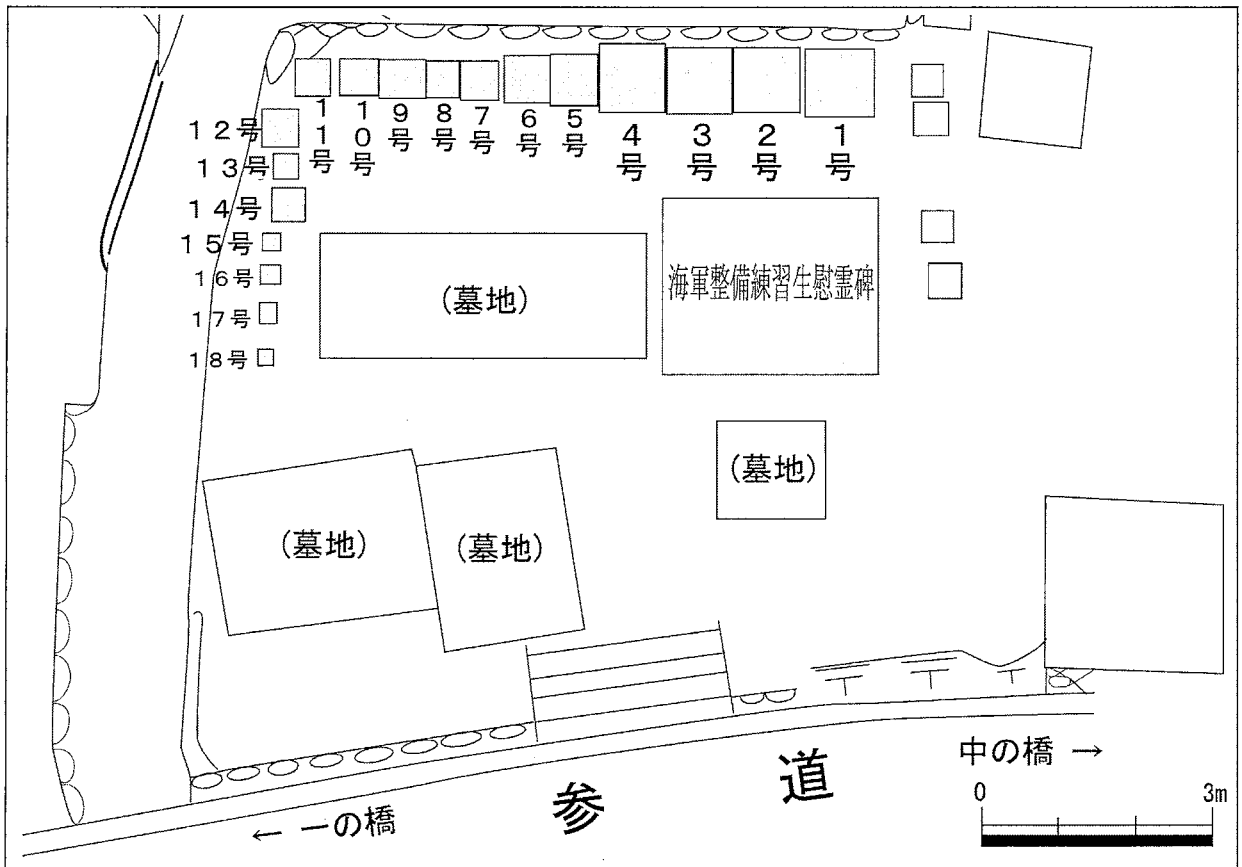


図２　堀尾家墓所石塔配置図

堀尾家と高野山との関係を示す文献史料は少ないが、堀尾家家臣の堀尾但馬が記した「堀尾古記」(注2) には、忠晴の死去の前後に、堀尾采女、但馬、修理など堀尾家の重臣が高野山に参ったこと、石塔を建てたことなどが記録されている。堀尾家に関わる石塔には、戒名、命日、施主などが刻まれており、「堀尾古記」など文献史料の記事を裏付け、堀尾家と高野山との関係を示す貴重な史料でもある。なお、高野山真言宗の根本道場であるだけに、梵字などの刻字はいずれも整美で、五輪塔、宝篋印塔、刻字の形態は高野山真言宗の典型と考えられる。

石塔群の中では、1 号石塔（宝篋印塔）は堀尾吉晴、忠氏、忠晴石塔と並び大型で、この石塔には「光堀尾山城守殿忠晴公御息女　為法光院殿全心玄貞大姉　施主石川宗十郎」と刻まれている。堀尾忠晴娘（石川廉勝妻：憲之母）のために石川宗十郎が施主となって建てたもので、宗十郎とは夫の廉勝と考えられる (注3)。忠晴には男子がなかったが、石川家に嫁いだ娘は、石川家が断絶後の堀尾家の菩提を弔い続けるうえで重要な存在であったのである (注4)。

注１　日野西眞定編著「奥院絵図」「高野山奥院総絵図」『高野山古絵図集成/解説索引』タカラ写真製版株式会社 1988

注２　「松江市の指定文化財」『松江市ふるさと文庫』7 松江市教育委員会 2010、「堀尾古記」『新修島根県史』史料編 2 島根県 1965、寛永 10 年の項に「六月廿八日ニ大坂より高野ニ参、采女、猪兵衛、但馬、修理、隼人、大隅参」「十月七日ニ高野へ但馬、縫殿、下井十太夫参、御石塔ヲ立ル」とある。堀尾忠晴の死の前後、複数の堀尾家の重臣たちが高野山に参る事実は、石塔を建てるなどの儀礼のためだけではなく、御家断絶の危機が迫る中、堀尾家安泰の祈祷を願うために出向いた可能性も考えられる。忠晴の死後、堀尾采女など堀尾家遺臣たちは忠晴娘の嫁いだ石川家の庇護を受けながら堀尾家の再興に奔走した（注４参照）。

注３　宗十郎の名は石川忠総（廉勝の父：妻は堀尾吉晴娘）、廉勝（忠総の子：堀尾忠晴娘の夫）ともに用いているが、ここでの施主石川宗十郎は夫の廉勝と考えられる。

注４　西尾克己、稲田信、佐々木倫朗「白華山養源寺（東京都千駄木）に所在する近世大名堀尾忠晴石塔について」『松江歴史館研究紀要』1 松江歴史館 2011、養源寺には堀尾忠晴、忠晴娘、松村監物、堀尾采女、堀尾勝明の石塔があるが、忠晴娘の石塔は最も大きい。

１号石塔（宝篋印塔：堀尾忠晴娘〔石川廉勝妻：憲之母〕石塔）［図３］

１号石塔は、墓所の奥側に 11 基並ぶ石塔群のうち、正面向かって右から１番目に配されている。花崗岩製の宝篋印塔で、相輪、笠、塔身、基礎、基壇の各部が揃っている。保存状態は良く、相輪先端から基壇までの総高は、257 cmである。

相輪は、上から宝珠、請花（上）、九輪、請花（下）、反花が刻まれ、総高 89 cmである。宝珠は高さ 24.5 cm、最大径 28.5 cm、請花（上）は高さ 10.5 cm、最大径 31 cm、九輪は高さ 20.5 cm、最大径 25 cm、請花（下）は高さ 12.5 cm、最大径 31 cm、反花は高さ 21 cm、最大径 30 cmである。

笠は、上部６段、下部２段の段級を作り出し、高さ 47.5 cm、軒幅 55 cm、上端幅 29 cm、下端幅 36.5 cmである。隅飾端先端幅は 68 cmで、外反している。隅飾の側面は一段の帯で縁取っている。

塔身は、高さ 34 cm、上端幅 34.5 cm、下端幅 34.5 cmで、４面にはそれぞれ月輪と蓮華座を彫り込む。

基礎は、上部に深みのある反花を刻み、高さ 55.5 cm、上端幅 35.5 cm、下端幅 54.5 cmである。正面には、「光堀尾山城守殿忠晴公御息女」「為法光院殿全心玄貞大姉」「施主石川宗十郎殿寛永十一年」

「四月廿七日」の銘文が刻まれている。堀尾忠晴娘のために夫の石川廉勝（宗十郎）が施主となって建てたと考えられる。

基壇は、上部に深みのある反花を刻み、高さ 31 cm、上端幅 59 cm、最大幅 84 cm、下端幅 81 cmである。

２号石塔（五輪塔：堀尾忠晴（ただはる）石塔）［図４］

花崗岩製の五輪塔で、空風輪の先端を欠くが、空風輪、火輪、水輪、地輪の各部が揃っている。保存状態は良く、総高は 238.5 cm（空風輪先端を復元すると、約 254.5 cm）である。地輪に刻まれた銘文より、堀尾忠晴の石塔と分かる。正面の空・風・火・水・地輪には の梵字を刻む。

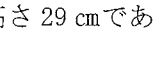
空風輪は一石からなり、先端を欠くが、総高 64 cm（復元高約 80 cm）である。空輪は上部が円錐形、下部が扁平球の宝珠形で、風輪は半円形である。空輪の円錐形は先端を欠くが高さ 8 cm（現存高）、底幅 21 cm、球形の最大幅 54 cm、高さ 32 cm、風輪と接する括れ部の幅 29 cmである。風輪は最大幅 52 cm、下端幅 36 cm、高さ 24 cmである。空・風輪とも四方に梵字を刻む。

火輪は、上端幅 39 cm、最大幅 73 cm、下端幅 68 cm、高さ 52.5 cmである。軒の厚さは中央で直線的に高さ 20 cm、左端 35 cm、右端 35 cmで、左右の端部は直線的に広がる。火輪の上端から軒に下がる稜線はほぼ直線的に降り、端部で大きくカーブする。四方に梵字を刻む。

水輪は、上端径 49 cm、最大径 92.5 cm、下端径 42 cm、高さ 58 cmで、やや上方で最大径をもつ横広の球形である。四方に梵字を刻む。

地輪は、上端幅 88 cm、下端幅 89 cm、高さ 64 cmである。四方に梵字を刻む。正面には、「寛永十天」「出雲隠岐両国太守光堀尾」「為圓城院殿」「高賢宗肖」「大居士追善」「山城守高階朝臣忠晴御芣」「九月二十日」を刻む。「堀尾古記」の寛永 10 年（1633）の項に「十月七日ニ高野へ但馬、縫殿、下井十太夫参、御石塔ヲ立ル」とあるのはこの２号石塔のことと考えられる。

３号石塔（五輪塔：堀尾吉晴（よしはる）石塔）［図５］

砂岩製の五輪塔で、空風輪、火輪、水輪、地輪の各部が揃っている。保存状態は良く、総高は 274.5 cmである。地輪に刻まれた銘文より、堀尾吉晴の石塔と分かる。正面の空・風・火・水・地輪には  の梵字を刻む。

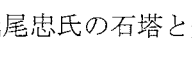
空風輪は一石からなり、総高 99 cmである。空輪は上部が円錐形、下部が扁平球の宝珠形で、風輪は半円形である。空輪の円錐形は高さ 26 cm、底幅 20 cm、球形の最大幅 56 cm、高さ 44 cm、風輪と接する括れ部の幅 31.6 cmである。風輪は最大幅 57 cm、下端幅 39 cm、高さ 29 cmである。空・風輪とも四方に梵字を刻む。

火輪は、上端幅 41 cm、最大幅 90 cm、下端幅 85 cm、高さ 50 cmである。軒の厚さは中央で 17 cm、左端 22 cm、右端 22 cmで、左右の端部はややカーブするが、中央は直線的である。火輪の上端から軒に下がる稜線はほぼ直線的に降り、端部でややカーブする。四方に梵字を刻む。

水輪は、上端径 50 cm、最大径 91 cm、下端径 49.5 cm、高さ 62.5 cmで、ほぼ中央で最大径をもつ横広の球形である。四方に梵字を刻む。

地輪は、上端幅 87 cm、下端幅 87 cm、高さ 63 cmである。四方に梵字を刻む。正面には、「為松庭世柏居士逆修」「慶長十二年」「四月日立之」「豊富朝臣堀尾帯刀吉晴」を刻む。この銘文から、吉晴が慶長 12 年（1607）4 月に逆修塔（逆（あらかじ）め生前に自分の墓を建て、自分ために仏事を修して死後の冥福を祈る）を建てことが知られる。吉晴が慶長 12 年４月に逆修塔を建てた理由は分からないが、嫡子で藩主、堀尾忠氏の死去から３年後であり、龍翔院（吉晴母）の死去（4 月 6 日没）がこの頃である。

４号石塔（五輪塔：堀尾忠氏（ただうじ）石塔）［図６］

砂岩製の五輪塔で、空風輪、火輪、水輪、地輪の各部が揃っている。保存状態は良く、総高は 263 cmである。地輪に刻まれた銘文より、堀尾忠氏の石塔と分かる。正面の空・風・火・水・地輪には  の梵字を刻む。

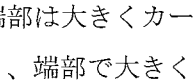
空風輪は一石からなり、総高 89 cmである。空輪は上部が円錐形、下部は側面が垂直な宝珠形で、風輪は半円形である。空輪の円錐形は高さ 30 cm、底幅 24 cm、球形の最大幅 42 cm、高さ 33.5 cm、風輪と接する括れ部の幅 25 cmである。風輪は最大幅 42.5 cm、下端幅 35.5 cm、高さ 25.5 cmである。空・風輪とも四方に梵字を刻む。

火輪は、上端幅 42 cm、最大幅 95 cm、下端幅 87 cm、高さ 49.5 cmである。軒の厚さは中央で 17 cm、左端 22.5 cm、右端 22.5 cmで、左右の端部は大きくカーブするが、中央は直線的である。火輪の上端から軒に下がる稜線はほぼ直線的に降り、端部で大きくカーブする。四方に梵字を刻む。

水輪は、上端径 45 cm、最大径 85 cm、下端径 48.5 cm、高さ 63.5 cmで、ほぼ中央で最大径をもつ横広の球形である。四方に梵字を刻む。

地輪は、上端幅 85 cm、下端幅 85 cm、高さ 61 cmである。四方に梵字を刻む。正面には、「為前雲州太守正四位堀尾」「忠氏朝臣天岫世球大居士」「施主慈父堀尾帯刀殿」「慶長九年八月四日敬白」を刻む。銘文から、慶長９年（1604）８月４日に死去した忠氏のために父堀尾吉晴が施主となり建てた石塔と分かる。

５号石塔（五輪塔：堀尾吉晴妻か）［図７］

砂岩製の五輪塔で、空風輪の先端を欠くが、空風輪、火輪、水輪、地輪の各部が揃っている。保存状態は良く、総高は 185.4 cm（空風輪先端を復元すると、約 204 cm）である。正面の空・風・火・水・地輪には  の梵字を刻む。

空風輪は一石からなり、先端を欠くが、総高 56.4 cm（復元高約 75 cm）である。空輪は上部が円錐形、下部は側面が垂直な宝珠形で、風輪は半円形である。空輪の円錐形は先端を欠くが、高さ 7 cm（現存高）、底幅 15 cm、球形の最大幅 34.5 cm、高さ 28.5 cm、風輪と接する括れ部の幅 17 cmである。風輪は最大幅 34 cm、下端幅 24.5 cm、高さ 21 cmである。空・風輪とも四方に梵字を刻む。

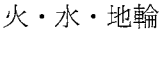
火輪は、上端幅 27.5 cm、最大幅 59 cm、下端幅 55.5 cm、高さ 36.5 cmである。軒の厚さは中央で 12.5 cm、左端 21.5 cm、右端 21.5 cmで、左右の端部は大きくカーブするが、中央は直線的である。火輪の上端から軒に下がる稜線はほぼ直線的に降り、端部で大きくカーブする。四方に梵字を刻む。

水輪は、上端径 30 cm、最大径 55.5 cm、下端径 28.5 cm、高さ 43 cmで、ほぼ中央で最大径をもつ横広の球形である。四方に梵字を刻む。

地輪は、上端幅 56 cm、下端幅 56 cm、高さ 49.5 cmである。四方に梵字を刻む。正面には、「(不明)」「(不明)」「于時・元和□(三または五)年四月□・・」「□意珠□」を刻む。高野山の堀尾家墓所に石塔が立てられる可能性のある人物として、元和３年（1617）４月に没した人物は見当たらないが、元和５年（1619）４月４日には堀尾吉晴妻（御方様：昌徳院殿俊芳宗英大姉）が亡くなっている[注1]。

注１　「堀尾古記」『新修島根県史』史料編２ 島根県 1965、佐々木倫朗、松原祥子「春光院所蔵の堀尾氏関連文献史料について」『松江市歴史叢書』１　松江市教育委員会 2007

６号石塔（五輪塔：松村監物(まつむらけんもつ)石塔）［図８］

花崗岩製の五輪塔で、空風輪の先端を欠くが、空風輪、火輪、水輪、地輪の各部が揃っている。保存状態は良く、総高は 182.4 cm（空風輪先端を復元すると、約 195 cm）である。地輪に刻まれた銘文より、村松監物の石塔と分かる。正面の空・風・火・水・地輪には  の梵字を刻む。

空風輪は一石からなり、先端を欠くが、総高 51.4 cm（復元高約 64 cm）である。空輪は上部が円錐形、下部は側面が垂直な宝珠形で、風輪は半円形である。空輪の円錐形は先端を欠くが、高さ 8.4 cm（現存高）、底幅 16 cm、球形の最大幅 34 cm、高さ 24.5 cm、風輪と接する括れ部の幅 22 cmである。風輪は最大幅 35 cm、下端幅 25 cm、高さ 18.5 cmである。空・風輪とも四方に梵字を刻む。

火輪は、上端幅 28 cm、最大幅 59 cm、下端幅 54.5 cm、高さ 38 cmである。軒の厚さは中央で 13.5 cm、左端 23.5 cm、右端 23.5 cmで、左右の端部は大きくカーブするが、中央は直線的である。火輪の上端から軒に下がる稜線はほぼ直線的に降り、端部で大きくカーブする。四方に梵字を刻む。

水輪は、上端径 37 cm、最大径 63 cm、下端径 37.5 cm、高さ 48 cmで、ほぼ中央で最大径をもつ横広の球形である。四方に梵字を刻む。

地輪は、上端幅 54.5 cm、下端幅 55 cm、高さ 45 cmである。四方に梵字を刻む。正面には、「于時寛永十亥」「居士」「為大恕玄忠」「九月廿六日　命日　松村監物」を刻む。松村監物は堀尾忠晴の死に殉じた家臣で[注1]、妙心寺春光院（京都市）[注2]、白華山養源寺（東京都千駄木）[注3]でも同様に堀尾家の墓所に石塔が建つ。なお、この石塔も２号石塔（堀尾忠晴石塔）と同じ時期に、堀尾家家臣らが高野山に出向いて建てた可能性がある。

注１　「堀尾古記」『新修島根県史』史料編２ 島根県 1965

注２　岡崎雄二郎、西尾克己、稲田信、樋口英行、佐々木倫朗、松原祥子「春光院に所在する来待石製石塔群について」『松江市歴史叢書』１　松江市教育委員会 2007

注３　西尾克己、稲田信、佐々木倫朗「白華山養源寺（東京都千駄木）に所在する近世大名堀尾忠晴石塔について」『松江歴史館研究紀要』１　松江歴史館 2011

７号石塔（五輪塔）［図９］

砂岩製の五輪塔で、空風輪、火輪、水輪、地輪の各部が揃っている。保存状態は良く、総高は 188 cmである。銘文はなく、誰の石塔であるか不明である。正面の空・風・火・水・地輪にはの梵字を刻む。

空風輪は一石からなり、総高 63.5 cmである。空輪は上部が円錐形、下部が扁平球の宝珠形で、風

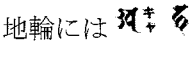
輪は半円形である。空輪の円錐形は高さ 16.5 cm、底幅 13 cm、球形の最大幅 33.5 cm、高さ 27.5 cm、風輪と接する括れ部の幅 17 cmである。風輪は最大幅 33.5 cm、下端幅 25 cm、高さ 19.5 cmである。空・風輪とも四方に梵字を刻む。

火輪は、上端幅 28 cm、最大幅 60.5 cm、下端幅 55.5 cm、高さ 36.5 cmである。軒の厚さは中央で 12 cm、左端 22 cm、右端 22 cmで、左右の端部は大きくカーブするが、中央は直線的である。火輪の上端から軒に下がる稜線はほぼ直線的に降り、端部で大きくカーブする。四方に梵字を刻む。

水輪は、上端径 30 cm、最大径 49 cm、下端径 30.5 cm、高さ 38 cmで、ほぼ中央で最大径をもつ横広の球形である。四方に梵字を刻む。

地輪は、上端幅 55.5 cm、下端幅 55.5 cm、高さ 50 cmである。四方に梵字を刻むが、他の刻字はない。

８号石塔（五輪塔：堀尾頼母助政家石塔）［図１０］

砂岩製の五輪塔で、空風輪の先端を欠くが、空風輪、火輪、水輪、地輪の各部が揃っている。保存状態は良く、総高は 156 cm（空風輪先端を復元すると、約 167.5 cm）である。地輪に刻まれた銘文より、寛永 13 年に没した堀尾頼母助の石塔と分かる。正面の空・風・火・水・地輪には  の梵字を刻む。

空風輪は１石からなり、先端を欠くが、総高 48.5 cm（復元高約 60 cm）である。空輪は上部が円錐形、下部が扁平球の宝珠形で、風輪は半円形である。空輪の円錐形は先端を欠くが、高さ 11 cm（現存高）、底幅 13.5 cm、球形の最大幅 27 cm、高さ 22 cm、風輪と接する括れ部の幅 15 cmである。風輪は最大幅 28 cm、下端幅 19.5 cm、高さ 15.5 cmである。空・風輪とも四方に梵字を刻む。

火輪は、上端幅 23.5 cm、最大幅 53.5 cm、下端幅 46.5 cm、高さ 34 cmである。軒の厚さは中央で 12 cm、左端 21.5 cm、右端 21.5 cmで、左右の端部は大きくカーブするが、中央は直線的である。火輪の上端から軒に下がる稜線はほぼ直線的に降り、端部で大きくカーブする。四方に梵字を刻む。

水輪は、上端径 26 cm、最大径 44 cm、下端径 26.5 cm、高さ 31.5 cmで、ほぼ中央で最大径をもつ横広の球形である。四方に梵字を刻む。

地輪は、上端幅 45.5 cm、下端幅 45 cm、高さ 42 cmである。四方に梵字を刻む。正面（現在裏面となっている）には、「寛永十三年堀尾□□」「生國尾州中嶋郡□□」(注1)「為□□院」「切岩□□□」「堀尾頼母助政家入」「八月二十七日為」を刻む。石塔にある「堀尾頼母助政家」の戒名や没年月日を示す史料は確認できていないが、慶長５～６年（1600～01）に御仕置を務め(注2)、「秋上家文書」（慶長 6 年(1601)4 月 26 日）など(注3)に奉行の一人として連署する堀尾頼母助正秀（元は高間善兵衛）という人物がおり、長子（堀尾佐兵衛）も頼母を名乗っていることから(注4)、寛永 13 年（1636）に没したのは頼母助正秀の息子の頼母助で、政家を名乗っていた可能性がある。堀尾家断絶後に石塔が建てられており、石川家と共に堀尾家再興などに尽力したのであろうか。

注１　中嶋郡は愛知県北西部に位置していた郡で、現在、愛知県稲沢市。中嶋郡には堀尾荘があり、堀尾氏の出所の可能性もある。堀尾吉晴の一族は現在の愛知県丹羽郡大口町を拠点としていたとされる。

注２　「堀尾古記」『新修島根県史』史料編２　島根県 1965

注３　「秋上家文書 221 堀尾家四奉行蓮署奉書」『意宇六社文書』島根県教育委員会 1974、福井将介「堀尾氏関係史料目録」

『松江市歴史叢書』2 松江市教育委員会 2010

注４　春光院所蔵の「堀尾近代系図並外孫縁者之略図」には、「堀尾左兵衛、左兵衛は堀尾頼母」「頼母長子頼母」とあり、堀尾頼母助正秀の息子も頼母と名乗っていたことが分かる。

９号石塔（宝篋印塔：堀尾民部（みんぶ）石塔）［図 11］

砂岩製の宝篋印塔で、相輪の一部を欠くが、相輪、笠、塔身、基礎、基壇の各部が揃っている。保存状態は良く、相輪（宝珠）先端から基壇までの総高は、149.5 cm（相輪を復元すると、約 202.5 cm）である。

相輪は、宝珠、請花（上）が残るが、九輪、請花（下）、反花は失われている。宝珠は高さ 18.5 cm、最大径 19 cmである。請花（上）は高さ 8.5 cm、最大径 19.5 cmである。残存高は 27 cm（九輪、請花（下）、反花を加えた推定復元総は約 80 cm）である。

笠は、上部６段、下部２段の段級を作り出し、高さ 37.5 cm、軒幅 41 cm、上端幅 21 cm、下端幅 26 cmである。隅飾先端幅は 48 cmで、外反している。隅飾の側面は一段の帯で縁取っている。

塔身は、高さ 26.5 cm、上端幅 24 cm、下端幅 24 で、４面にはそれぞれ月輪と蓮華座を彫り込む。

基礎は、上部に反花を刻み、高さ 40.5 cm、上端幅 24.5 cm、下端幅 41 cmである。

基礎の正面には、「施主雲州松江村」「堀尾采女正殿」「為寶山榮真大居士」「・・・立之」「元和六□三月六日」を刻む。「堀尾古記」(注1) の元和６年の項に「三月六日ニ民部果ル」とあることから、９号石塔は堀尾采女が施主となって父親である民部 (注2) のために建てたことが分かる。

基壇は、上部に深みのある反花を刻み、高さ 18 cm、上端幅 42 cm、下端幅 50 cmである。

注１　「堀尾古記」『新修島根県史』史料編２ 島根県 1965

注２　松江市玉湯町報恩寺には来待石製大型石廟があり（西尾克己、稲田　信、樋口英行「玉湯・報恩寺の石塔群」『来待ストーン研究』6 来待ストーンミュージアム 2005）、表面全体に戒名である「寶山榮眞大居士」の文字が刻まれた卒塔婆が陽刻されている。９号石塔の調査で堀尾民部の戒名が「寶山榮真大居士」と特定できたことから、報恩寺の石廟も民部のためのものと特定できる。

10 号石塔（宝篋印塔：堀尾勘解由（かげゆ）石塔）

砂岩製の宝篋印塔で、相輪（宝珠）の一部を欠くが、相輪、笠、塔身、基礎、基壇の各部が揃っている。保存状態は良い。相輪は、上から宝珠、請花（上）、九輪、請花（下）、反花が刻まれる。笠は、上部６段、下部２段の段級を作り出す。隅飾は外反し隅飾の側面は一段の帯で縁取っている。塔身は、４面にはそれぞれ月輪と蓮華座を彫り込む。基礎は、上部に反花を刻み、格座間の中に開蓮華を彫る。基礎の正面には、「桂岩院殿祥雲世□大□□」「慶長十三年十二月□日」を刻む。堀尾勘解由の戒名が「桂岩院殿祥雲世端大居士」、没年月日が慶長 13 年 12 月５日であることから (注1)、10 号石塔は勘解由のために建てられたことが分かる。

注１　岡崎雄二郎、西尾克己、稲田信、樋口英行、佐々木倫朗、松原祥子「春光院に所在する来待石製石塔群について」「春光院所蔵の堀尾氏関連文献史料について」『松江市歴史叢書』１ 松江市教育委員会 2007

11号石塔（宝篋印塔）

砂岩製の宝篋印塔で、相輪（宝珠）の一部を欠くが、相輪、笠、塔身、基礎、基壇の各部が揃っている。保存状態は良い。相輪は、上から宝珠、請花（上）、九輪、請花（下）、反花が刻まれる。笠は、上部６段、下部２段の段級を作り出す。隅飾は外反し隅飾の側面は一段の帯で縁取っている。塔身は、４面にはそれぞれ月輪と蓮華座を彫り込む。基礎は、上部に反花を刻み、格座間の中に開蓮華を彫る。刻字はない。

13号石塔（五輪塔）［図12］

砂岩製の五輪塔で、全体に保存状態は良く、総高は115.5㎝である。空風輪、火輪、水輪、地輪を別々の石で作る。正面の空・風・火・水・地輪には𑖀𑖽𑖨𑖿𑖩𑖽𑖨𑖿𑖩𑖽𑖨𑖿𑖩𑖽𑖨𑖿𑖩𑖽𑖨𑖿𑖩の梵字を刻む。

空風輪は一石からなり、総高 43 ㎝である。空輪は上部が円錐形、下部が扁平球の宝珠形で、風輪は半円形である。空輪の円錐形は高く突き出て高さ 22 ㎝、底幅 11.5 ㎝、球形の最大幅 16 ㎝、高さ 11 ㎝、風輪と接する括れ部の幅 10.5 ㎝である。風輪は最大幅 16.5 ㎝、下端幅 13 ㎝、高さ 10 ㎝である。空・風輪とも四方に梵字を刻む。

火輪は、上端幅 16 ㎝、最大幅 33 ㎝、下端幅 28 ㎝、高さ 20 ㎝である。軒の厚さは中央で 7 ㎝、左端 14 ㎝、右端 14 ㎝で、左右の端部から中央に向けてゆるやかにカーブする。火輪の上端から軒に下がる稜線はほぼ直線的に降り、端部で大きくカーブする。四方に梵字を刻む。

水輪は、上端径 18.5 ㎝、最大径 33 ㎝、下端径 19 ㎝、高さ 27.5 ㎝で、ほぼ中央で最大径をもつ横広の球形である。四方に梵字を刻む。

地輪は、上端幅 35 ㎝、下端幅 35 ㎝、高さ 25 ㎝である。四方に梵字を刻むが、他には刻字はない。

14号石塔（五輪塔：堀尾采女母・妻か）［図13］

砂岩製の五輪塔で、全体に保存状態は良く、総高は127㎝である。空風輪、火輪、水輪、地輪を別々の石で作る。正面の空・風・火・水・地輪には𑖀𑖽𑖨𑖿𑖩𑖽𑖨𑖿𑖩𑖽𑖨𑖿𑖩𑖽𑖨𑖿𑖩𑖽𑖨𑖿𑖩の梵字を刻む。

空風輪は一石からなり、総高 38 ㎝である。空輪は上部が円錐形、下部が扁平球の宝珠形で、風輪は半円形である。空輪の円錐形は高さ 6 ㎝、底幅 8 ㎝、球形の最大幅 20 ㎝、高さ 17 ㎝、風輪と接する括れ部の幅 15.5 ㎝である。風輪は最大幅 22 ㎝、下端幅 14.5 ㎝、高さ 15 ㎝である。空・風輪とも四方に梵字を刻む。

火輪は、上端幅 16 ㎝、最大幅 34 ㎝、下端幅 28 ㎝、高さ 23 ㎝である。軒の厚さは中央で 8 ㎝、左端 13 ㎝、右端 13 ㎝で、左右の端部はゆるくカーブするが、中央は直線的である。火輪の上端から軒に下がる稜線はほぼ直線的に降り、端部で大きくカーブする。四方に梵字を刻む。

水輪は、上端径 23 ㎝、最大径 37 ㎝、下端径 23 ㎝、高さ 31 ㎝で、ほぼ中央で最大径をもつ横広の球形である。四方に梵字を刻む。

地輪は、上端幅 39 ㎝、下端幅 39 ㎝、高さ 35 ㎝である。四方に梵字を刻む。正面には、「雲州松江堀尾采女正」「為□□□立之」「為芳□妙□大姉」「寛永四年」「十一月十四日」を刻む。寛永４年(1627)11月 14 日に亡くなった人物については確認できないが、「堀尾采女」や「芳□妙□大姉」などの銘文から、堀尾采女の母か、妻の可能性が考えられる。

12号石塔（円頂方柱型）

円頂方柱型の竿石と台石からなる。竿石には「文化十一□五月九日」「定誉正山良碩法師」「霊位」「覚誉□□良硯居士」「文政十一□七月二七日」「施主和州平群郡長安寺邑」「渡邊良□立之」を刻む。文化11年（1814）5月9日に亡くなった大和国平群郡長安寺村（奈良県郡山市長安寺町）の渡邊某氏石塔は、同族（息子か）が文政11年（1828）7月27日に建てたものである。現在、堀尾家墓所に置かれている理由は不明である。なお、『紀伊續風土記』(注1)によれば、龍生院の末寺として大和国宇智郡に2か寺と記載されている。

注1　「紀伊續風土記高野山之部」『紀伊続風土記（五）』歴史図書社 1970

15号石塔（円頂方柱型）

円頂方柱型の竿石と台石からなる。竿石には、「勢州一志郡那珂道村北川重右衛門俊正」「元文五庚申天十一月十八日」「普観院眞月□現居士」「俗名北川宅□右衛門俊英」「宿坊龍生院」を刻む。

元文5年（1740）11月18日の銘を持つ石塔で、伊勢国一志郡那珂道村（三重県松坂市三雲町）北川重右衛門俊正が北川宅□右衛門俊英のために建てたものである。両人は名前より親子と考えられる。また、「宿坊龍生院」とあることより、明治以降、龍生院に関わる墓所が整理された時に堀尾家墓所に置かれた可能性がある。なお、那珂道（中道）村は、江戸時代には和歌山藩領で、村内には真言宗養命寺ある。寛政12年（1800）「大指出帳」によると、地士に北川安右衛門がいたことが知られる(注1)。なお、地士は和歌山藩の制度で置かれた地元の有力者で、地侍である。

注1　「三重県」『角川地名大辞典』角川書店 1983

16号石塔（円頂方柱型）

円頂方柱型の竿石と台石からなる。竿石には、「俗名津田織衛門□中建之」「任山霊雲信士霊位」「安永五丙申六月十八日」を刻む。安永5年（1776）6月18日の没年月日を刻むが、生国などはなく、来歴は不明である。また、現在、堀尾家墓所に置かれている理由も不明である。

17号石塔（石地蔵）

光背をもった地蔵尊で、風化のため一部剝落が認められる。刻字などはなく、来歴は不明である。

18号石塔（小型五輪塔）

小型の一石五輪塔で、空輪、風輪、火輪、水輪が残る。刻字などはなく、来歴は不明である。

3．おわりに

高野山奥の院に所在する近世大名堀尾家墓所について、現存する石塔の配置・形態・刻字・年代・石材などについて、詳細に確認することができた。また、これまであまり紹介されることのなかった高野山と堀尾家との関係を、高野山金剛峯寺、大円院、普賢院、高野山大学などのご協力で確認できた。以下、概要をまとめておく。

表１　石塔の形成要素（配列・被供養者・形態・年代・全高・石材）

石塔配列	被供養者	形　態	年代（和歴）	年代（西歴）	全高(cm)	石　材
１号石塔	堀尾忠晴娘(石川廉勝妻:憲之母)	宝篋印塔	寛永１１年	1634 年	257	花崗岩
２号石塔	堀尾忠晴	五輪塔	寛永１０年	1633 年	254.5	花崗岩
３号石塔	堀尾吉晴	五輪塔	慶長１２年	1607 年	274.5	砂岩
４号石塔	堀尾忠氏	五輪塔	慶長　９年	1604 年	263	砂岩
５号石塔	堀尾吉晴妻か	五輪塔	元和　□年	1619 年頃	204	砂岩
６号石塔	松村監物	五輪塔	寛永１０年	1633 年	195	花崗岩
７号石塔	－	五輪塔	－	－	188	砂岩
８号石塔	堀尾頼母助政家	五輪塔	寛永１３年	1636 年	167.5	砂岩
９号石塔	堀尾民部	宝篋印塔	元和　６年	1620 年	202.5	砂岩
10 号石塔	堀尾勘解由	宝篋印塔	慶長１３年	1608 年		砂岩
11 号石塔	－	宝篋印塔	－	－		砂岩
13 号石塔	－	五輪塔	－	－	115.5	砂岩
14 号石塔	堀尾采女母・妻か	五輪塔	寛永　４年	1627 年	127	砂岩

表２　刻字一覧

石塔配列	俗　名	戒　名	命　日	建立年月日	施　主
１号石塔（堀尾忠晴娘〔石川廉勝妻：憲之母〕）	光堀尾山城守殿忠晴公御息女	法光院殿全心玄貞大姉	寛永十一年四月廿七日		石川宗十郎
２号石塔（堀尾忠晴）	出雲隠岐両国太守光堀尾山城守高階朝臣忠晴	圓城院殿高賢宗肖大居士（追善）	寛永十天九月二十日		
３号石塔（堀尾吉晴）	豊富朝臣堀尾帯刀吉晴	松庭世怡居士（逆修）		慶長十二年四月日	
４号石塔（堀尾忠氏）	前雲州太守正四位堀尾忠氏朝臣	天岫世球大居士	慶長九年八月四日		慈父堀尾帯刀
５号石塔（堀尾吉晴妻か）			元和□年四月□		
６号石塔（松村監物）	松村監物	大恕玄忠居士	寛永十亥九月廿六日		
７号石塔					
８号石塔（堀尾頼母助政家）	堀尾頼母助政家（生國尾州中嶋郡□□）	□□院切岩□□□	寛永十三年八月二十七日		堀尾□□
９号石塔（堀尾民部）		寶山榮真大居士	元和六□三月六日		雲州松江村堀尾采女正
10 号石塔（堀尾勘解由）		桂岩院殿祥雲世□大□□	慶長十三年十二月□日		
11 号石塔					
13 号石塔					
14 号石塔（堀尾采女母・妻か）		芳□妙□大姉	寛永四年十一月十四日		雲州松江堀尾采女正

堀尾家墓所は、高野山奥の院の参道に面した平坦面奥にあり、堀尾家に関わる石塔として 13 基を確認した。これらの石塔群は、堀尾吉晴、忠氏の出雲国入府後、高野山龍生院を宿坊とし奥の院に堀尾家墓所が設けられたことにより、堀尾家当主及び一族のために建てられたものである。紀州藩が編纂した『紀伊續風土記』(注1) にある「堀尾吉晴主（中略）正五九の月には武運栄久の誓祈を乞ひ香華佛餉の資糧を附す」「堀尾家雲隠両国の太守たりし時建立の碑数基あり 伊勢亀山石川侯先操を追ひて壇契篤し」の記事が示すように、堀尾吉晴は武運栄久の誓祈を高野山真言宗に乞うた。一方、堀尾家の菩提は、堀尾家断絶後、忠晴娘が嫁いだ石川家によって弔われ、墓所は今日に伝わった。高野山奥の院に堀尾家墓所が成立し、石塔が建てられた年代は、堀尾忠氏石塔（４号石塔）が建てられた慶長９年(1604)頃から、堀尾忠晴娘石塔（１号石塔：石川廉勝妻：憲之母）が建てられた寛永 11 年(1634)頃までの間にほぼ限られる。

石塔の形態は、五輪塔と宝篋印塔である。２～８・13・14 号石塔は五輪塔（堀尾吉晴、堀尾忠氏、堀尾忠晴、松村監物、堀尾頼母助など）、１・９～11 号石塔は宝篋印塔（堀尾忠晴娘、堀尾民部、堀尾勘解由など）である。堀尾家当主墓には五輪塔が採用されていることが分かる。いずれの石塔も約 30 年間の間に建てられており、形式的には大きな変化はなく、梵字など刻字も整美で、高野山真言宗の総本山奥の院に建つ 17 世紀初頭の典型的な五輪塔、宝篋印塔といえる。五輪塔をみると、空輪が長く尖り、また、火輪は高さがあり、降棟の先端が強く尖っている。宝篋印塔は、相輪の頂部が尖り、九輪は短く、各輪を沈線状に表現し、しっかりした返花を彫る。

石塔の規模（総高：〔復元高〕）は、３号石塔（堀尾吉晴）274.5 cm、４号石塔（堀尾忠氏）263 cm、１号石塔（堀尾忠晴娘）257 cm、２号石塔（堀尾忠晴）〔254.5〕cm、５号石塔（吉晴妻か）〔204〕cm、９号石塔（堀尾民部）〔202.5〕cm、６号石塔（松村監物）〔195〕cm、７号石塔 188 cm、８号石塔（堀尾頼母助政家）〔167.5〕cm 、14 号石塔（采女母・妻か）127 cm、13 号石塔 115.5 cmの順である。

堀尾家当主と忠晴娘の石塔が 250 cm以上の大型、（吉晴妻か）・堀尾民部・松村監物ら上級家臣層の石塔が 200 cm前後、堀尾頼母助、（采女母・妻か）の石塔などが 170 cm以下となっており、生前の地位などが石塔の規模に反映しているのであろう。18 世紀代の堀尾家墓所が描かれた宝永４年(1707)の「奥院絵図」、寛政５年（1793）の「高野山奥院総絵図」(注2) では、正面に鳥居を配し、玉垣に囲まれた墓域内の石塔の大きさが描き分けられ、手前から奥に向かって４列に大型化している。おそらく、元々堀尾家墓所では、当主らの総高８、９尺前後の石塔を最奥に、その手前に当主に近い家族や上級家臣らの総高６、７尺前後の石塔を、前の２列にその他の一族・家臣らのやや小型の石塔を建て並べていたと考えられる。江戸時代に奥の院へ通じる参道から堀尾家墓所を見ると、奥行きが感じられ、総ての石塔が見渡せたと想像される。堀尾家墓所は、絵図にある他の大名墓に比べ、石塔数が多く、かつ規模も大小あり、大名墓の威容さが見てとれたことであろう。

なお、「奥院絵図」、「高野山奥院総絵図」には、墓域内に石塔２４基が４列に描かれているが、今回の調査で確認された堀尾家に関わる石塔は 13 基である。この絵図の石塔数が正しいとすれば、絵図の描かれた時点では、参道脇の玉垣に囲まれた墓域内に現在の約２倍の石塔が並んでいたことになる。墓所の成立の契機は、堀尾氏の出雲国入府間もない慶長９年（1604）、藩主堀尾忠氏の死去であったと考えられ、堀尾家が宿坊として関係をもつ龍生院を介して奥の院に墓所が営まれた。その後、慶長 12

年（1607）に吉晴の逆修塔（３号石塔）ができ、寛永期に当主忠晴石塔（２号石塔）が 家臣により建てられ、最後に、忠晴娘石塔（１号石塔：石川廉勝妻）が石川宗十郎（廉勝）により建てられ、大規模石塔の製作は終了する。堀尾家墓所は、基本的にはこの４基を中心とする墓所と考えられる。その前列には、松村監物、堀尾頼母助、堀尾民部、堀尾勘解由、等の中規模な石塔（６号、８号、９号、10号）が並んでいたであろう。他に采女母・妻かの石塔（14号）があるが、小規模な石塔は現存しない。これは、近代に堀尾墓所が整理され、現在の数に減ったと推定される。では、現在残る石塔以外に、どのような人物の石塔が建っていたのであろうか。堀尾家の出雲国領有後の墓所は、高野山奥の院の他にも、岩倉寺（安来市広瀬町）、忠光寺（同）、圓成寺（松江市栄町）、妙心寺春光院（京都市）、養源寺（東京千駄木）に現存し、そこでは堀尾家当主の石塔近くに、一族や堀尾家と関係の深い家臣たちの石塔も見られる(注3)。高野山の堀尾家宿坊であった龍生院が現存せず、過去帳や位牌などが確認できない中で、かつての堀尾家墓所の全容を知ることはできない。しかし、他の墓所と同様に、堀尾家一族や堀尾家と関係の深い家臣たちの石塔が建てられていたことは想像に難くない。

石塔の石材は、砂岩（和泉砂岩か）と花崗岩の二種類の石が使用されている。砂岩がほとんどを占め、堀尾家に関わる石塔の建立は慶長期から寛永期で終わるが、それ以降に墓所に持ち込まれた堀尾家に関係の無い石塔も同じ砂岩製である。花崗岩を使用した石塔は、１号石塔（堀尾忠晴娘）、２号石塔（堀尾忠晴）、６号石塔（松村監物）で、その他の石塔は砂岩を使用している。堀尾家石塔のうち、寛永期の１、２号石塔（忠晴娘、忠晴）は花崗岩が採用されたことになる。寛永期の堀尾采女の母か妻の石塔や堀尾頼母助の石塔は砂岩である。１、２号石塔のほか、松村監物石塔も花崗岩製であるが、監物の石塔は京都の妙心寺春光院、江戸の養源寺にも建つなど、忠晴に殉じた忠臣として、特別丁重に扱われたのかもしれない。慶長期には、大名墓にも砂岩を使用しているが、寛永期には花崗岩と砂岩石材の利用の違いが階層や経済力の違いを表している可能性もある。ただ、いずれの石材にしろ、江戸時代、巨大な墓石を海岸部から遠く離れた紀伊山地の奥部まで運ぶ労力と、それにかかる費用も相当なものであったと推定される。

堀尾家墓所の中でも、特に注目されるのが３、４号石塔（堀尾吉晴、忠氏）で、奥の院における砂岩製五輪塔で慶長年間のものでは最大規模の大きさである。地輪と水輪が古式の形状をしていることも、他の同時代の石塔では見られない。堀尾家墓所の近くに山内一豊の花崗岩製の石塔があるが、一回りは小さい。高野山奥の院において造立当時は異彩をはなった五輪塔だったと想像される(注4)。

なお、堀尾家と高野山との関係を示す文献史料は少ないが、堀尾家重臣堀尾但馬が記した「堀尾古記」(注5)には、忠晴の死去の前後に、堀尾采女、但馬、修理など堀尾家の重臣が高野山に参ったこと、石塔を建てたことなどが記録されている。忠晴の死の前後に複数の堀尾家重臣たちが高野山に参る事実は、石塔を建てるという儀礼などのためだけではなく、御家断絶の危機が迫る中、堀尾家安泰などの祈祷を願うために出向いた可能性も考えられる。

以上のとおり、高野山奥の院に所在する近世大名堀尾家墓所の調査を通して、高野山奥の院における大名墓のあり方の一端と堀尾家の宗教的背景の一端を確認することができた。『紀伊續風土記』にある「堀尾吉晴主（中略）正五九の月には武運栄久の誓祈を乞ひ香華佛餉の資糧を附す」の記事が示すように、堀尾吉晴は誓祈を高野山真言宗に願っている。

吉晴は、堀尾家の武運栄久などを願い、高野山龍生院を宿坊とし、奥の院に墓所を設けるとともに、領国支配や松江城下町形成、松江城築城などにあたっても、「長栄」「武運長久」などの誓祈、祈祷を高野山真言宗に願ったと考えるのが妥当であろう(注6)。

注1　「紀伊續風土記高野山之部」『紀伊続風土記（五）』歴史図書社 1970、「高野山之部」龍生院の項には、「（前略）堀尾吉晴主此天の霊異を仰信ありて宮殿を修し正五九の月には武運栄久の誓祈を乞ひ香華佛餉の資糧を附す 且堀尾家雲隠両国の太守たりし時建立の碑数基あり 伊勢亀山石川侯先操を追ひて壇契篤し」とある。

注2　日野西眞定編著「奥院絵図」「高野山奥院総絵図」『高野山古絵図集成/解説索引』タカラ写真製版株式会社 1988

注3　堀尾家当主の墓石近くに一族や家臣の石塔が残るものとして、圓成寺（松江市栄町）では堀尾但馬、妙心寺春光院（京都市）では、堀尾泰晴妻、堀尾吉晴妻、堀尾忠氏妻、奥平家昌、野々村河内妻（吉晴娘）、松村監物、養源寺（東京都千駄木）では、堀尾勝明、松村監物、堀尾采女の石塔を確認している。なお、報恩寺（松江市玉湯町）には堀尾忠氏墓と伝わる石塔があり、近くに堀尾民部の石廟がある。

注4　木下浩良氏（高野山大学図書館課長）のご教示による。

注5　「堀尾古記」『新修島根県史』史料編2 島根県 1965

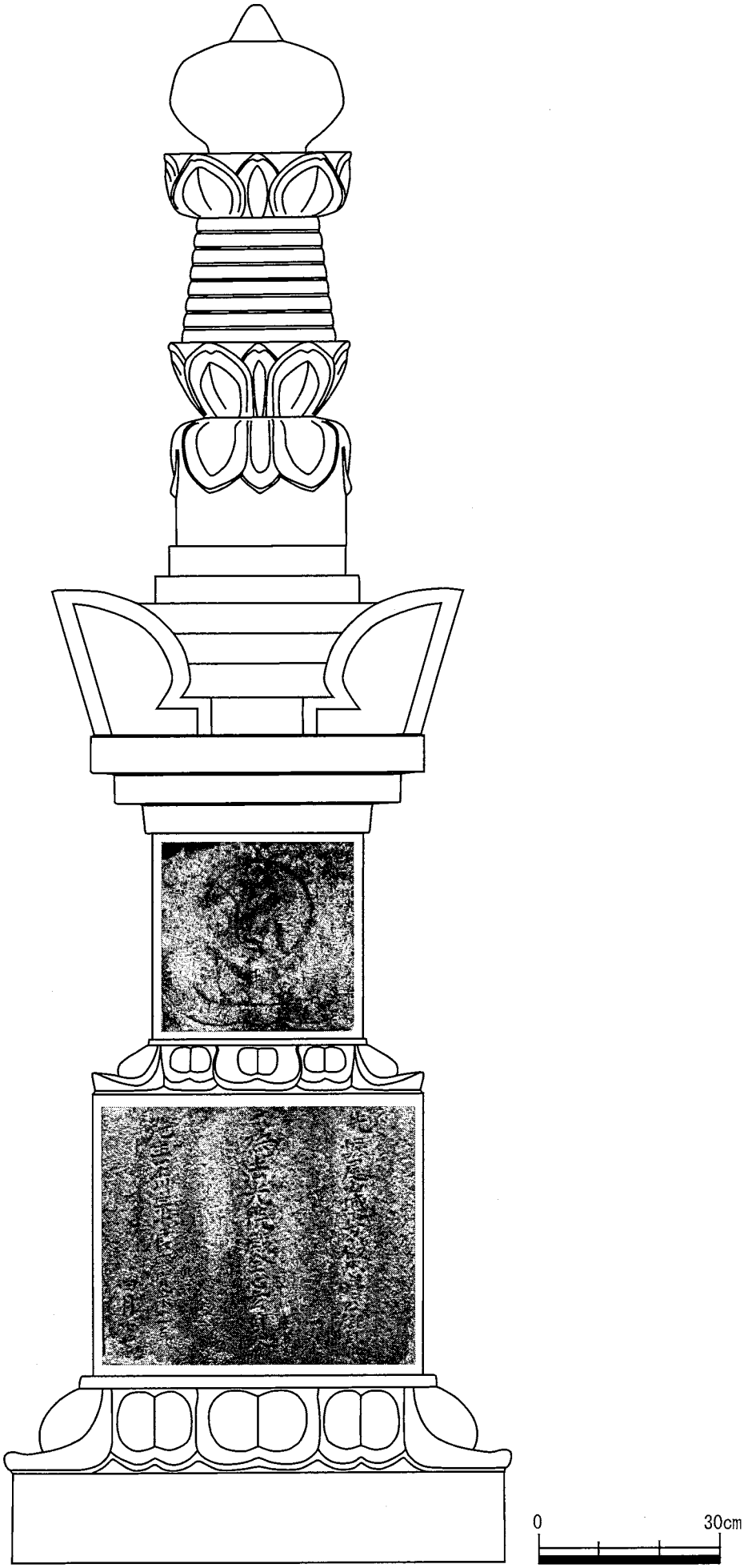
注6　松江城の鬼門（北東）には真言宗千手院（松江市石橋町）、裏鬼門（南西）には真言宗報恩寺（松江市玉湯町）を配置するなど、松江城と高野山真言宗との関係は極めて深い。松江城天守創建に関わる誓祈、祈祷が高野山で行われた可能性も高い。

［本稿は、平成24年10月6～8日に、松江市史編纂事業の石造物、木札調査の一環として高野山奥の院（和歌山県）において行った調査の成果を報告するものである。調査にあたっては、西尾克己、稲田　信、木下　誠があたり、本稿の執筆も分担した。また、図面の浄書は高屋茂男が行った。本稿が、高野山奥の院における近世大名墓の解明と堀尾家の宗教的背景の解明とに、少しでも役立てば幸いである。］

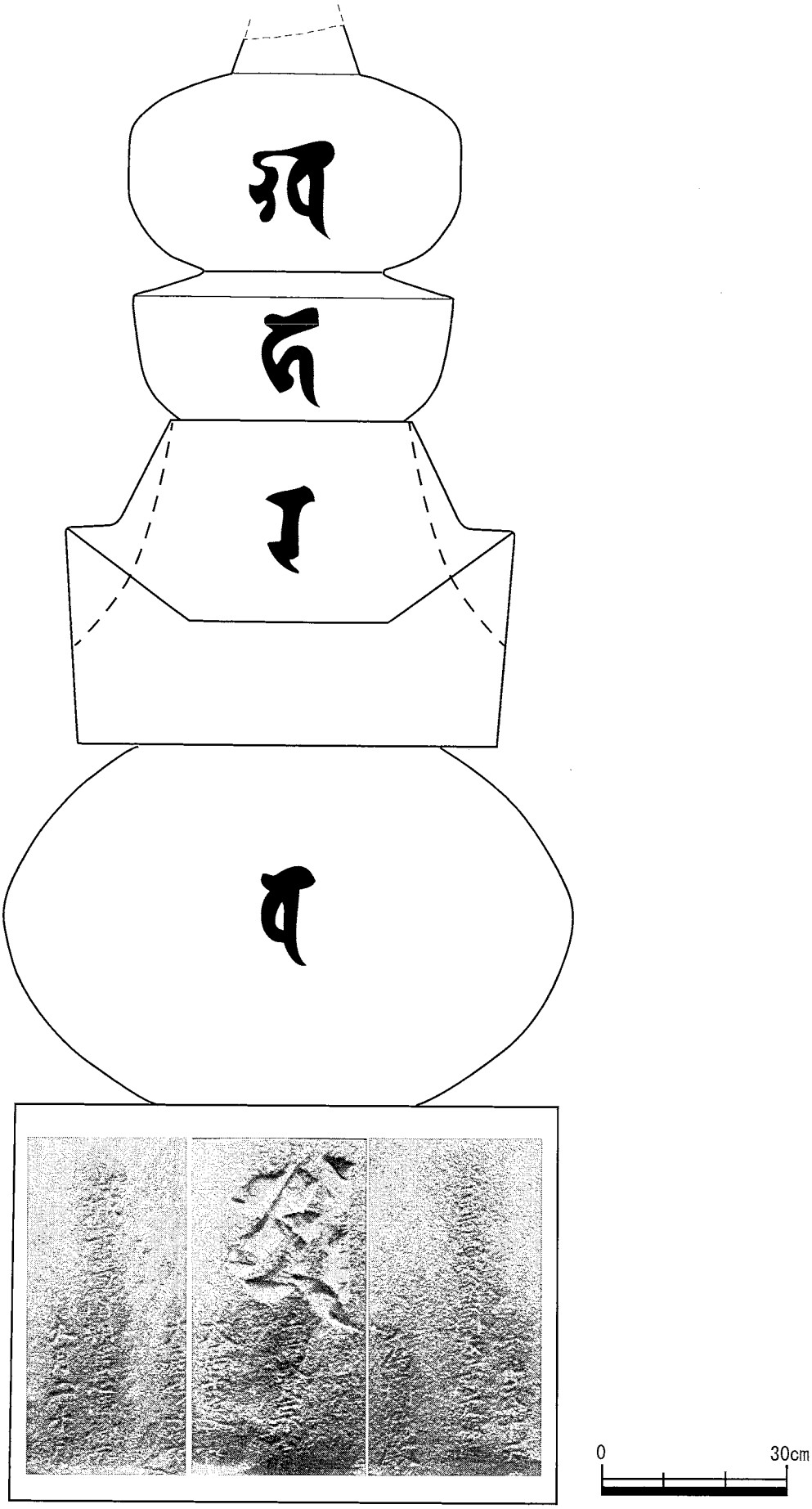
謝　辞

本稿を執筆するにあたり、堀尾秀樹氏（松江堀尾会理事）、藤田光寛氏（高野山大学学長・高野山大円院住職）、森寛勝氏（高野山真言宗総本山金剛峰寺執行・高野山普賢院住職）、吉川東吾氏（高野山真言宗総本山金剛峰寺財務部工務課長）、木下浩良氏（高野山大学図書館課長）、西原司朗氏（高野山大学密教文化研究所係長）、新庄正典氏（松江歴史館学芸員）、福井将介氏（松江市史料編纂室専門調査員）には、調査へのご便宜と高野山と堀尾氏との関わりについて御教示をいただきました。記して感謝申し上げます。

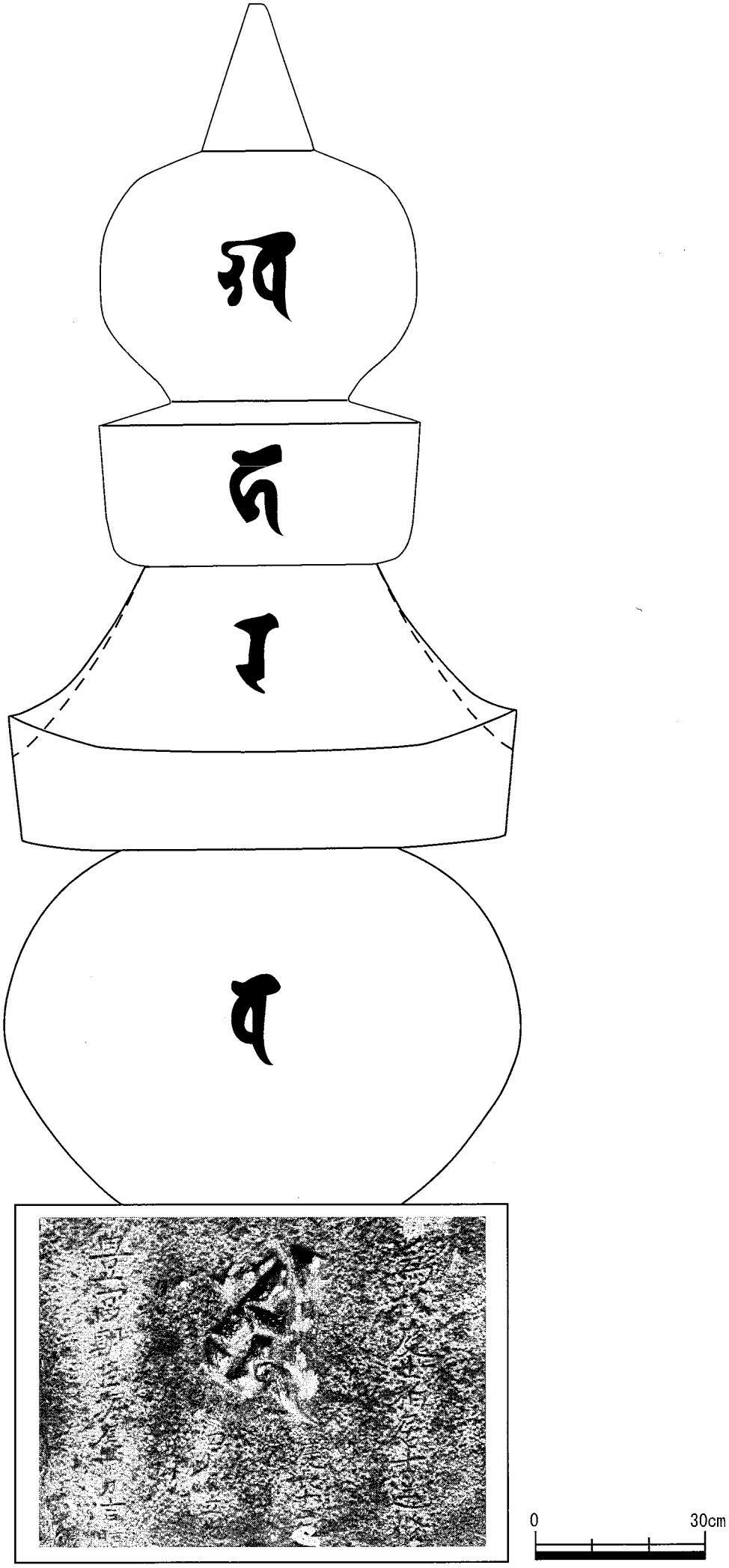
（にしお・かつみ　松江市史編集委員）
（いなた・まこと　松江市文化財課史料編纂室長）
（きのした・まこと　松江市文化財課史料編纂室副主任）



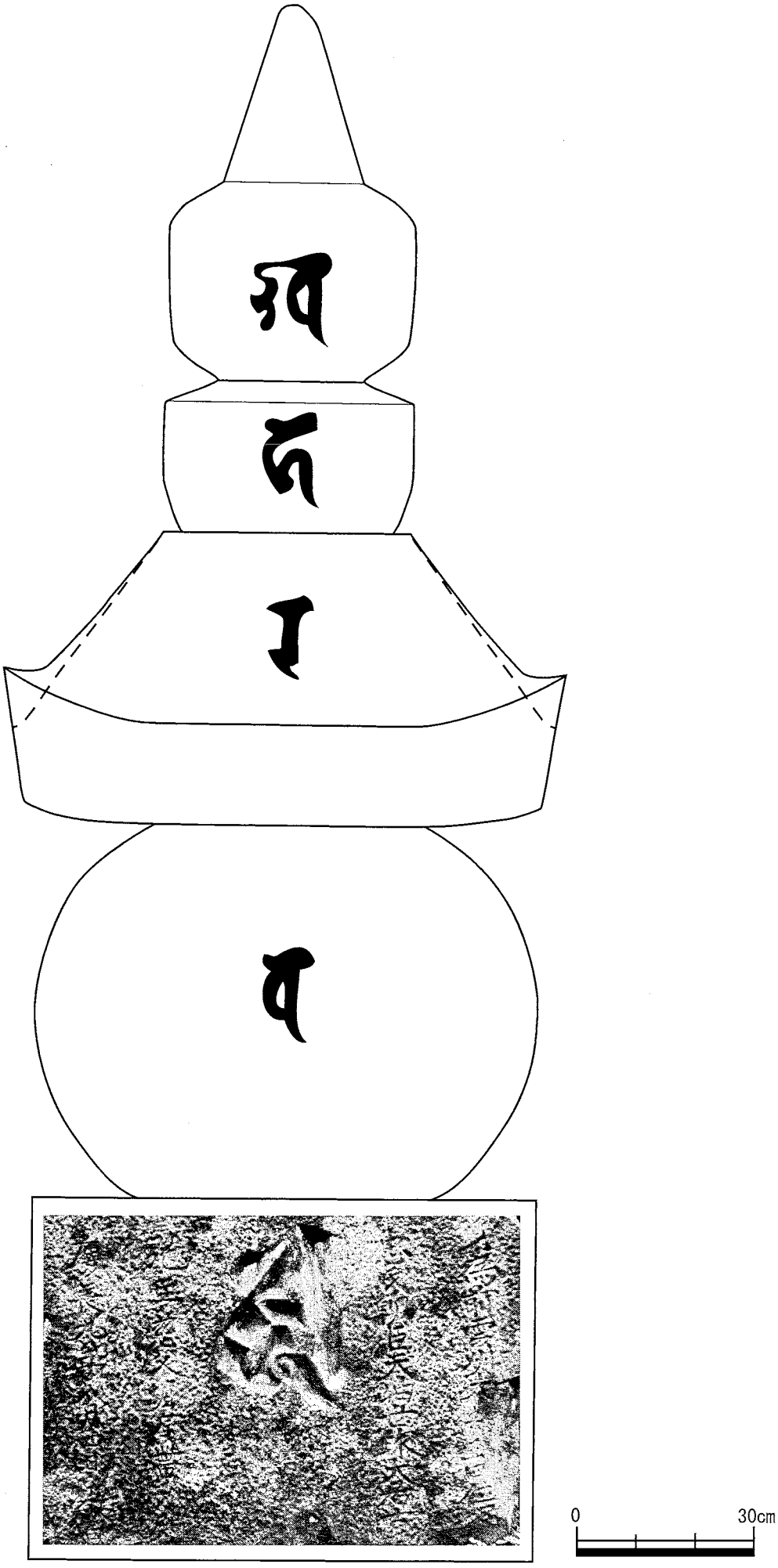
1号石塔（堀尾忠晴娘〔石川廉勝妻：憲之母〕石塔）



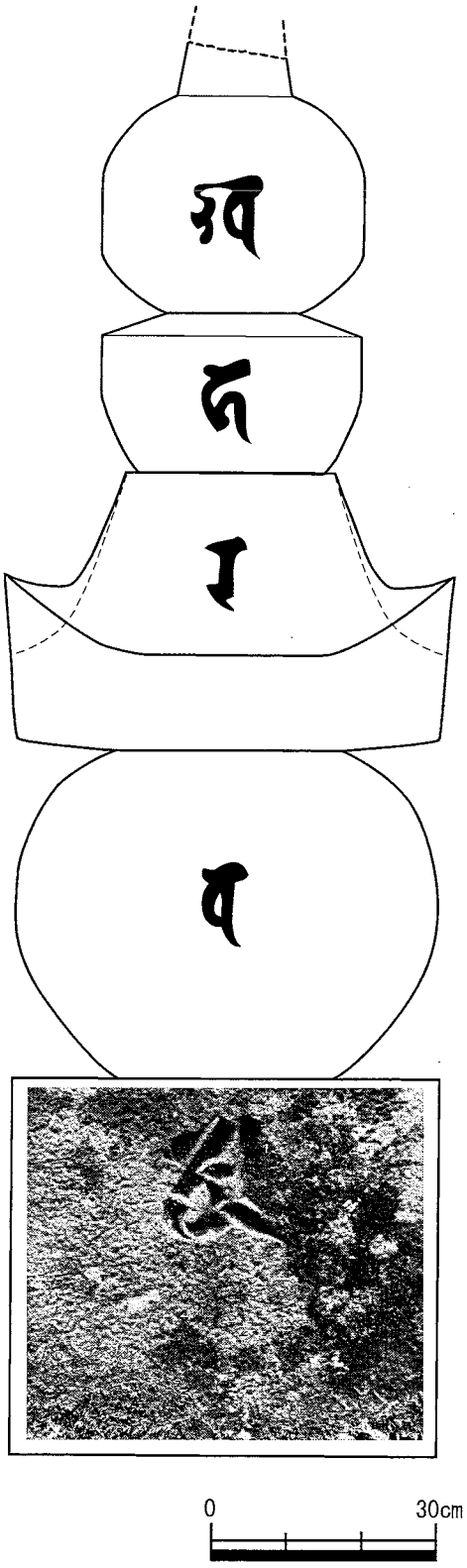
2号石塔（堀尾忠晴石塔）



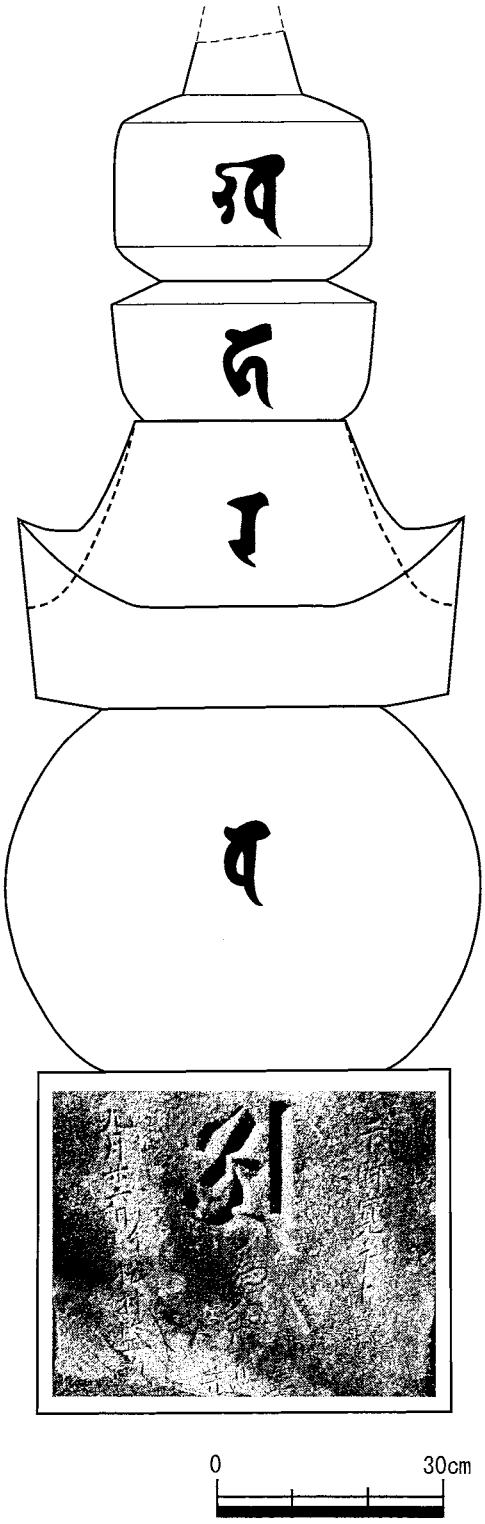
3号石塔（堀尾吉晴石塔）



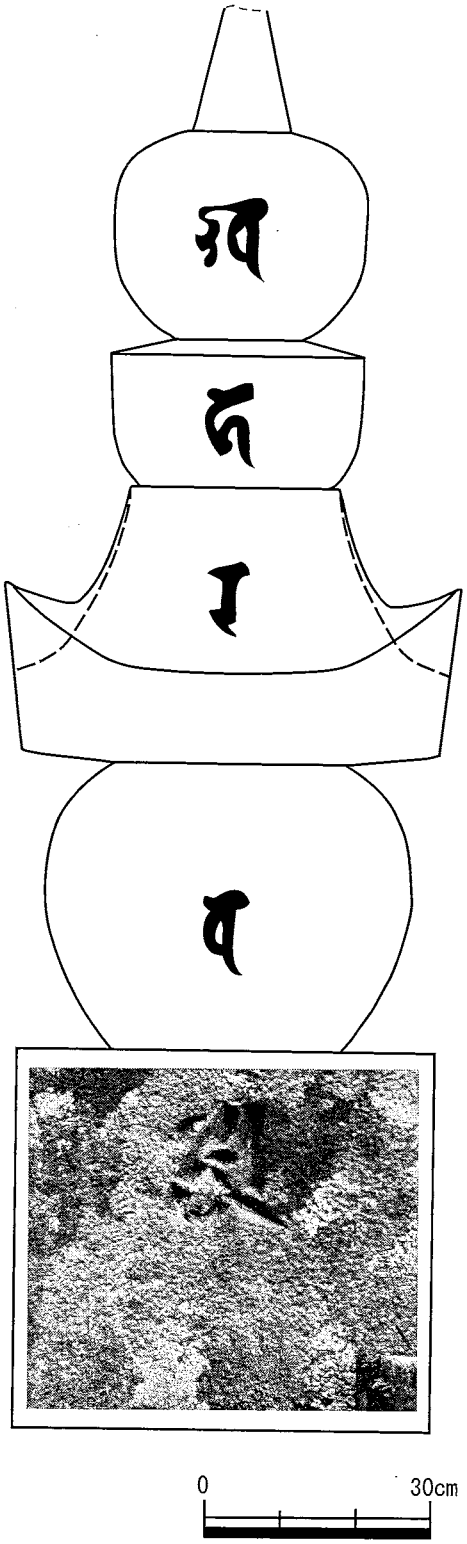
4号石塔（堀尾忠氏石塔）



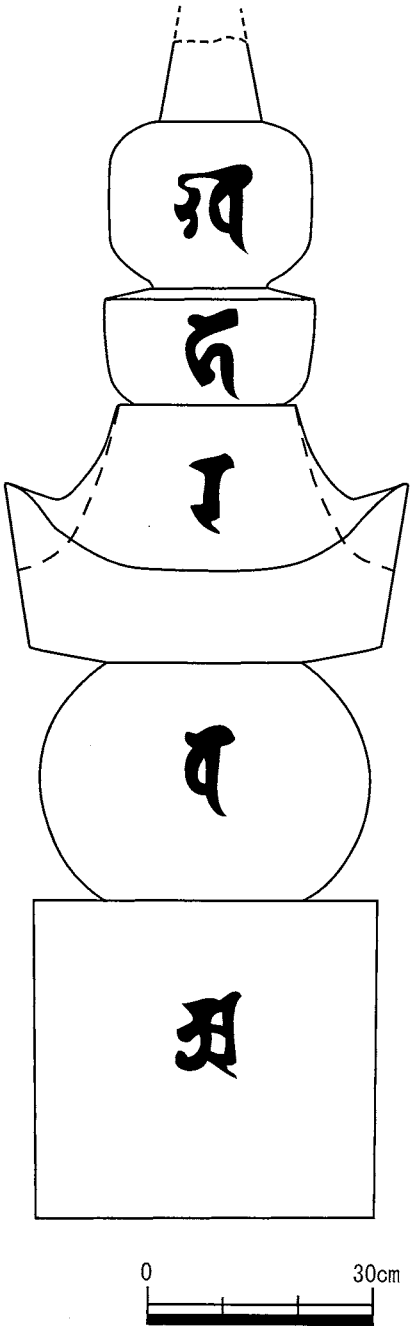
5号石塔（堀尾吉晴妻か）



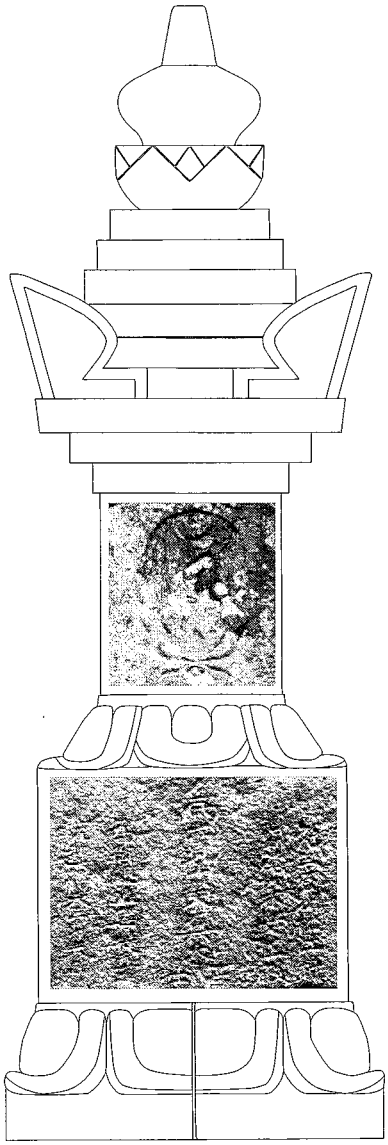
6号石塔（松村監物石塔）



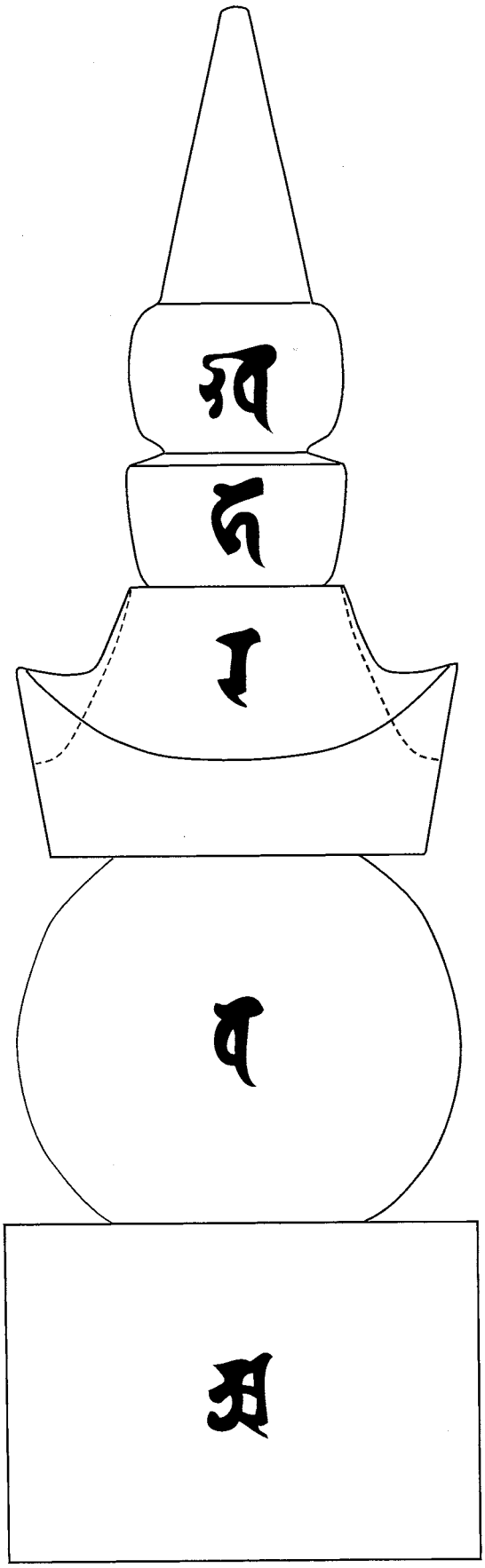
7号石塔



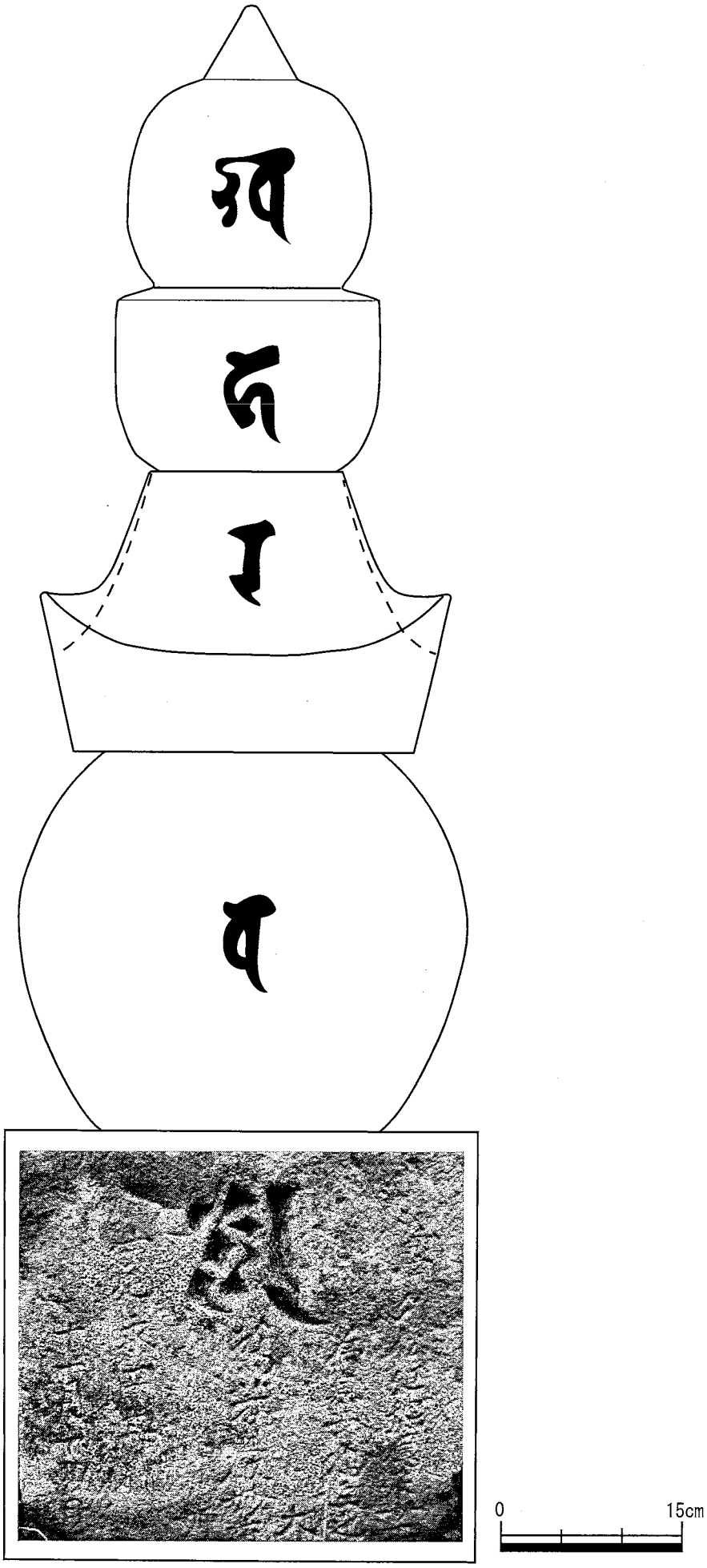
8号石塔（堀尾頼母助政家石塔）



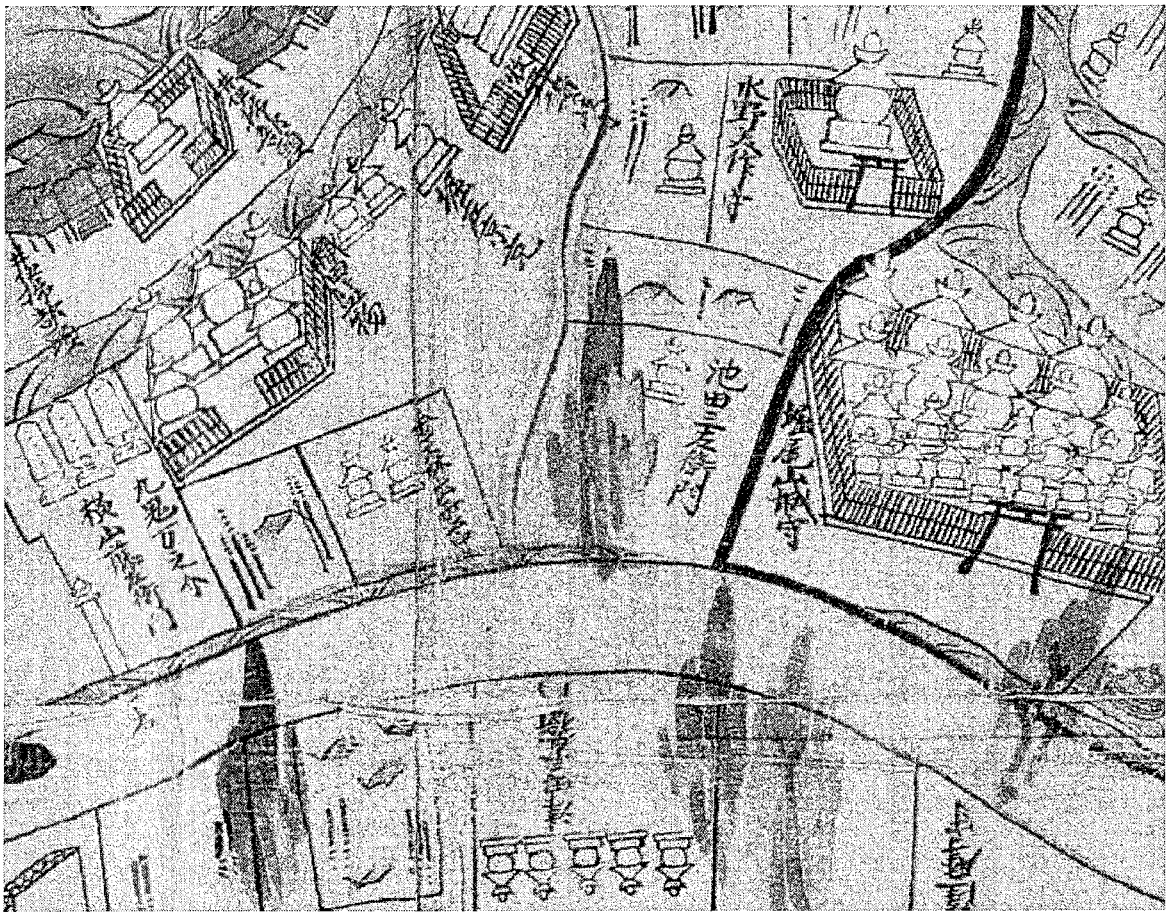
9号石塔（堀尾民部石塔）



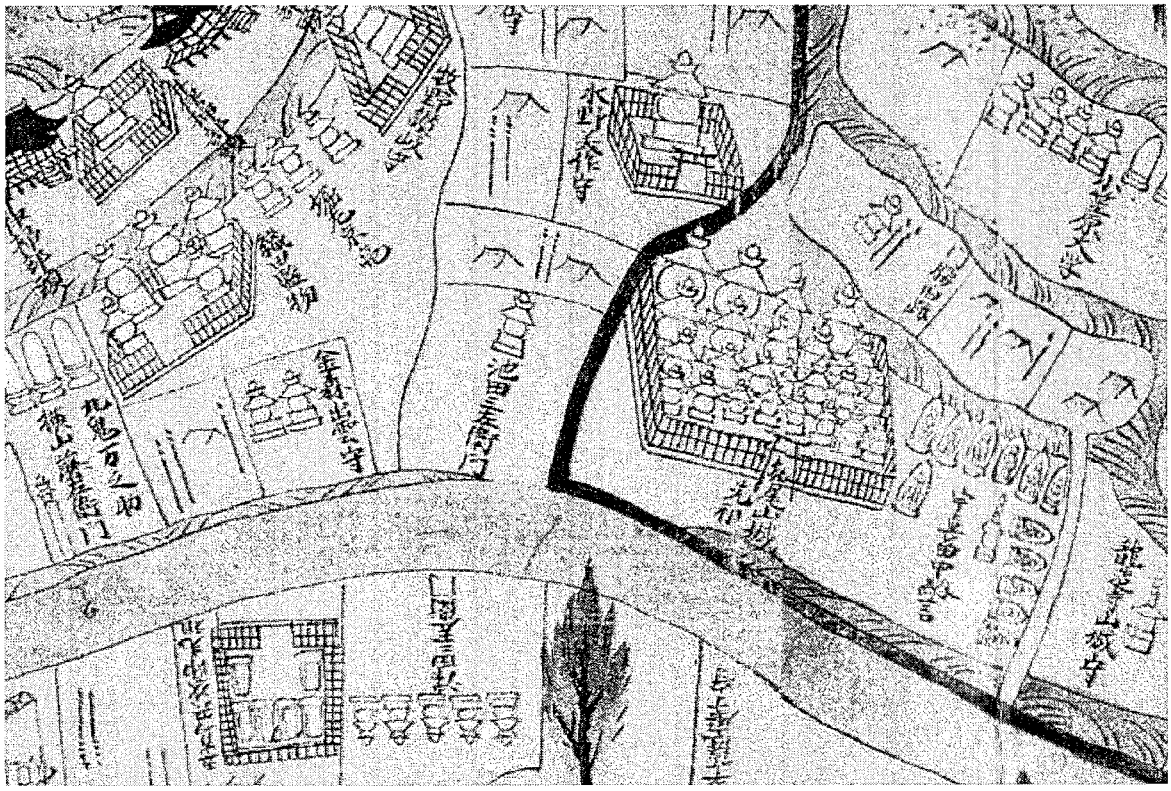
13号石塔



14号石塔(釆女母・妻か)

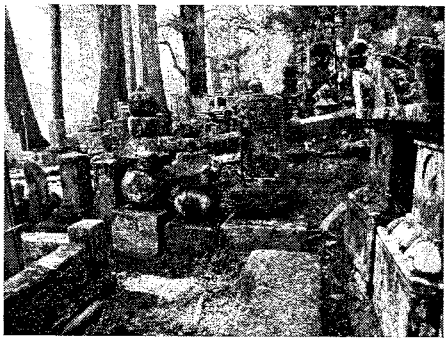


「奥院絵図」（宝永４）に描かれた堀尾家墓所



「高野山奥院総絵図」（寛政５）に描かれた堀尾家墓所

堀尾家墓所正面（奥側と左側面に堀尾家の石塔が並ぶ）

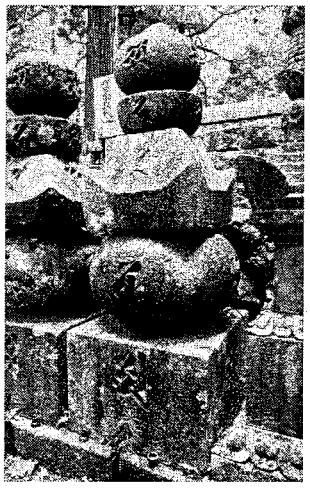


堀尾家墓所（右側から 10 号～ 18 号石塔）

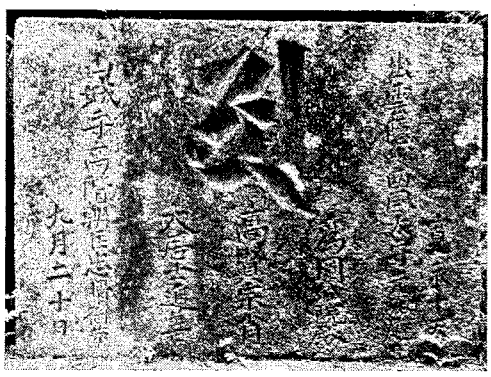
堀尾家墓所（右側から 1 号石塔）

1 号石塔（堀尾忠晴娘）
［石川廉勝妻：憲之母］

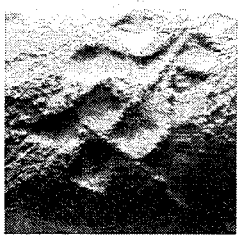
1 号石塔基礎の銘文



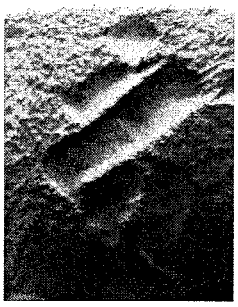
2 号石塔（五輪塔：堀尾忠晴石塔）



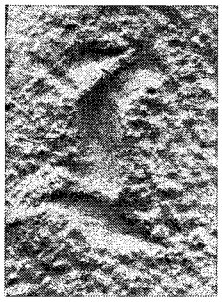
2 号石塔地輪の銘文



2 号石塔空輪の梵字
（拓本）

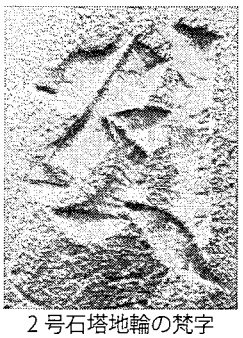


2 号石塔風輪の梵字
（拓本）

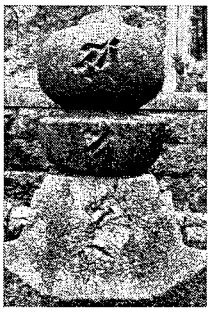


2 号石塔火輪の梵字
（拓本）

2 号石塔水輪の梵字
（拓本）

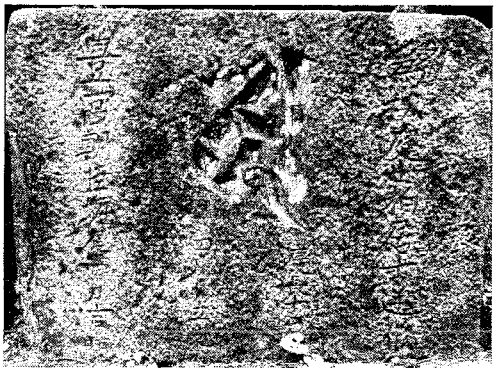


2 号石塔地輪の梵字
（拓本）



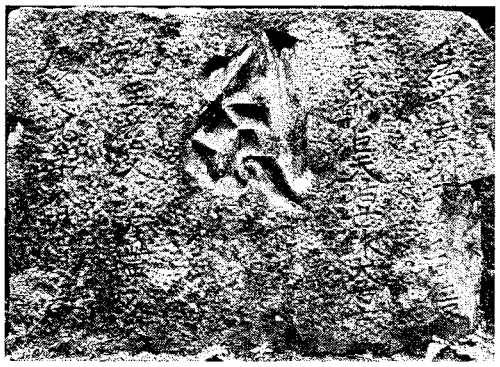
2 号石塔空・風・火輪
の 梵字

3 号石塔（五輪塔：堀尾吉晴石塔）



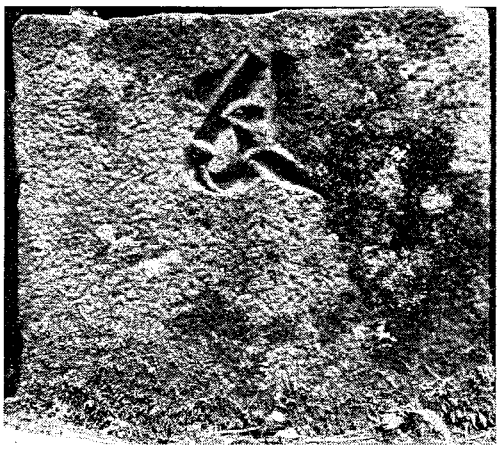
3 号石塔地輪の銘文

4 号石塔（五輪塔：堀尾忠氏石塔）



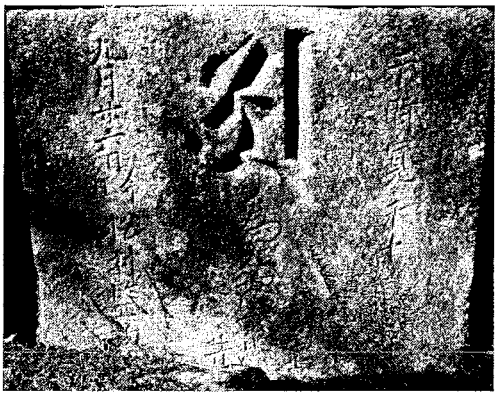
4 号石塔地輪の銘文

5 号石塔（五輪塔：堀尾吉晴妻か）

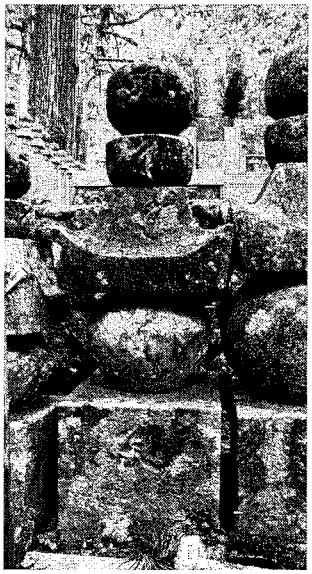


5 号石塔地輪の銘文

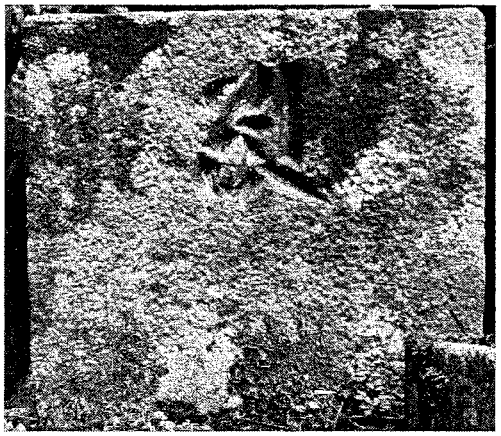
6 号石塔（五輪塔：松村監物石塔）



6 号石塔地輪の銘文

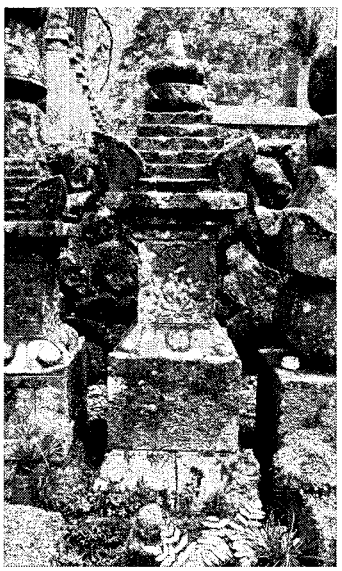


7 号石塔（五輪塔）



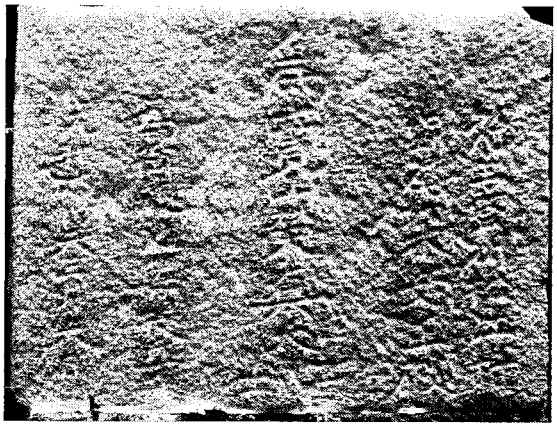
7 号石塔地輪

8 号石塔（五輪塔：堀尾頼母助政家石塔）

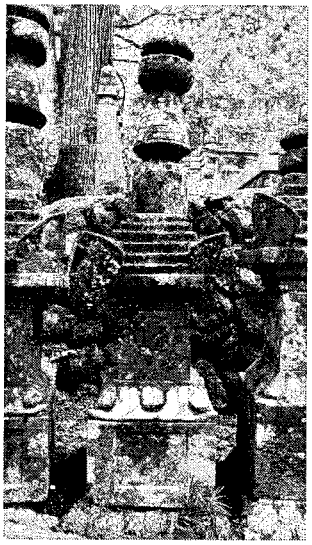


9 号石塔（宝篋印塔：堀尾民部石塔）

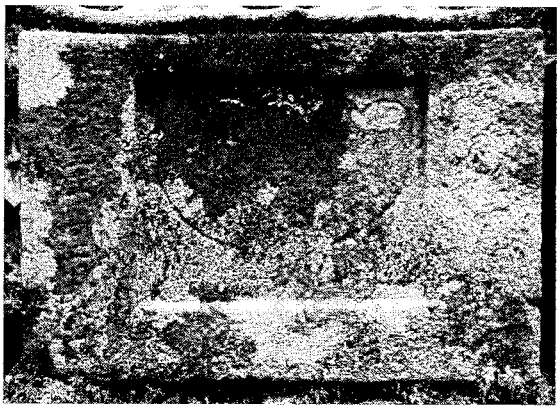
9 号石塔（堀尾民部石塔）基礎の銘文



9 号石塔基礎の銘文（拓本）

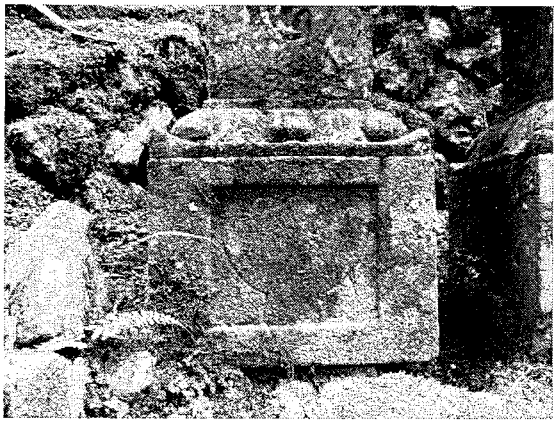


10 号石塔（宝篋印塔：堀尾勘解由石塔）



10 号石塔基礎の銘文

11 号石塔（宝篋印塔）



11 号石塔基礎

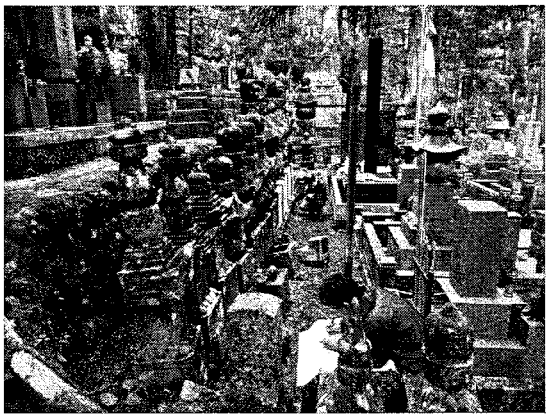
12 号石塔（円頂方柱型）

13 号石塔（五輪塔）

14 号石塔（五輪塔：采女母・妻か）

14 号石塔地輪の銘文

15 ～ 18 号石塔



石塔の調査風景（11 号石塔側から）

ISSN 2185-9205

松江歴史館
研究紀要

第3号

◆松江藩研究◆

城下町松江研究の現状と課題 ---------- 西島　太郎 ----- 1

松平斉貴の上洛道中記録に見る旅の姿 ---------- 小山　祥子 ----- 27
——「御上京一途」を参考として——

松江藩儒黒澤石斎の研究（一） ---------- 西島　太郎 ----- 37

二人の甫庵　——小瀬甫庵と山岡甫庵—— ---------- 福井　将介 ----- 50

堀櫟山・市郎父子に関する新知見 ---------- 西島　太郎 ----- 73
——展覧会開催後の調査より——

資料紹介　安達家文書目録・翻刻（一） ---------- 新庄　正典 ----- 101

「三谷家住宅」調査報告書 ---------- 足立　正智 ----- 130(31)

高野山奥の院に所在する堀尾家墓所について ---------- 西尾　克己 ----- 160(1)
——近世大名墓と堀尾家の宗教的背景——　稲田　信　木下　誠

◆博物館研究◆

松江歴史館整備事業で生じた問題とその整理 ---------- 大塚　享義 ---- 122(39)

平成24年企画展
「松江藩士の息子画家になる。孫写真家になる。」展の記録と分析 ---------- 西島　太郎 ---- 109

平成25年3月

松江歴史館

MATSUE HISTORY MUSEUM BULLETIN

No. 3 MARCH, 2013

CONTENTS

◆STUDY OF MATSUE CLAN IN THE EDO PERIOD◆

Current Status and Issues of research MATSUE castle town---------- NISHIJIMA Taro ---- 1

The figure of the trip seen to record the going-up-to-Kyoto trip of the Matsudaira Naritake—Refer to a "Gojyoukyouitto" ----------KOYAMA Sachiko---- 27

Study of SEKISAI KUROSAWA is a Confucian scholar of MATSUE clan vol.1 ---------- NISHIJIMA Taro---- 37

A research for "two persons ' Hoan (小瀬甫庵 and 山岡甫庵)" ---- FUKUI Masayuki---- 50

New knowledge about the father and son REKIZAN and ICHIRO HORI----------NISHIJIMA Taro---- 73

Document introduction : A list and reprint of the document of ADACHI (安達家) vol.1 ----------SINSYO Masanori---- 101

Investigative report of MITANI house----------ADACHI Masanori---- 130 (31)

Religious background of early modern times ----------NISHIO Katsumi---- 160 (1)
daimyo graves and the Horios INATA Makoto
KINOSITA Makoto

◆MUSEUM STUDIES◆

Problems and solutions associated with the construction of Matsue History Museum ----------OTSUKA Takayoshi---- 122 (39)

Recording and analysis of the exhibition. "Become a photographer grandson. Son to become a painter of Matsue samurai" on exhibition ---------- NISHIJIMA Taro---- 109

Published by

Matsue History Museum

Matsue, Japan

平成二十五年（二〇一三）三月二十九日発行

松江歴史館研究紀要　第三号

編集・発行　松江歴史館

住　　所　島根県松江市殿町二七九番地
〒六九〇―〇八八七
電　　話　〇八五二―五五―一六〇七
ＦＡＸ　〇八五二―三二―一六一一